

ヲ続行スヘシ

- 三、第三十二軍ハ右企圖ニ策應シ本来ノ任務完遂スヘシ
特ニ海空部隊ノ壮挙ニ比肩スル地上部隊ノ積極果敢
ナル行動ニ依リ其名譽ヲ發揮センコトヲ期スヘシ
第十方面軍司令官 安藤利吉

5日、「菊池飛行場より飛機にて隈庄に至る。命あり明
薄暮空撃を敢行せよと。命を拜して吾に感なし。桜花散
る此の時散り得る身の幸福をつくづく感じぬ。凡人敏男
の散るべき時は遂に来たりぬ。夜会食を行ふ。共栄の諸
姉訪れくれぬ。愉しき最後の宵なりき。余が此の日誌を
“みどり”に託す”そして最後はこう結ばれた。「人生は
美しう御座いました」(「小林日誌」)。

「今朝絵一枚矢島様に贈る、菩薩なり。今日菊池に行
き亦気後をとづれ最後の別れをなす。七時黒石へかへ
る。夜宴会あり。生矢島様に行き坊ちゃん、嬢ちゃん(お
ぢいさんは陸軍少将、父は中佐なり。)より色々なものを送
る」(「岡部日誌」)。

この日午後4時、第八飛行師団命令²⁹⁰によって明日6日
の突撃が決定した。

台飛九作命第五号

第八飛行師団命令 四月五日 一六〇〇
新田原

- 一、陸海航空主力、明六日一四〇〇—一八〇〇ノ間ニ亘
リ南部沖風西方海面ニ於ケル敵船団ヲ索メ徹底攻撃
ヲ実施ス
二、誠第三六、三七、及第三八飛行隊ハ明六日一二〇〇
迄ニ攻撃準備ヲ完成スヘシ
搭載爆弾ハ一〇〇匁トシ増裝トス
師団長 山本健児

台飛作命甲第二百四十二号

第八飛行師団命令 四月五日一八三〇
台 北

- 一、連合艦隊ハ明六日以降其ノ主力(第六航空軍及第五
航空艦隊)ヲ以テ沖風周辺ノ敵機動部隊及輸送船団
ヲ攻撃シ一挙ニ乾坤一擲ノ決戦ヲ企圖ス
球兵団亦之ニ呼応シテ近ク反撃作戰ヲ開始ス
二、師団ハ連合艦隊及球兵団ノ攻勢ニ呼応シ主トシテ敵
水上艦艇(母艦ヲ含ム)ヲ索メテ攻撃セントス
三、(以下略—筆者註)

隊員が搭乗する直協機の航続力には不安があったた
め、緊急整備として燃料の増槽330、このうち130を胴体
内に、200を胴体下に取り付けた。爆弾1個は翼下に装着
した²⁹¹。日誌で見ると、この作業を2日から4日にかけて
菊池飛行場で行っている。福澤大佐の回想では、一部は

4月1日、主力は4月3日までに整備を完了する目途が
ついたという²⁹²。

一方、4日から5日にかけて米軍は、海軍の鹿屋基地
が発信した「天信電令作第39号」、連合艦隊司令長官が天
一号作戰部隊宛てた電報「連合艦隊電令作第601号」を
傍受し、翻訳した。前者の内容は、米軍に対するX日(5
日)予定の大規模な自殺攻撃(特攻)作戰が計画され、
本作戰が菊水一号作戰と呼称されるということ、後者は
波状攻撃をもって敵機動部隊と攻略船団を捕捉撃滅する
計画、であった。さらに台湾の第八飛行師団の発信する
電報も傍受、翻訳され、特攻隊の行動は逐一米軍に知ら
れることとなった²⁹³。

突撃命令が下された5日、最後の遺書をしたための隊
員は数多くいたことと思われる。小屋哲郎軍曹(三十七
飛行隊)の遺書が、現在知覧特攻平和会館に展示されて
いる。その一部を紹介する。

「(前略)甘露の法雨をいだし突込み候故とい戦死の
しらせなくとも四月六日十八時体当り仕り候間仏前へ法
雨上げられん事を御祈り致し候。では御両親様御元気で。
一足先に御奉仕り皆様を御出を御待ち致し居り候。
御祖父様へは父上より御報告なし下され度候。敬具 哲
郎 御父上様 あす散ると思ひもされぬさくらかな【う
すい舞紙に墨で走り書き】²⁹⁴。

なお、余談であるが、小林隊が隈庄に展開していた3
月29日から4月5日までの期間、後年「世界のミフネ」
と呼ばれた俳優の三船敏郎と接触する機会があったもの
と思われる。当時、三船は25歳、隈庄飛行場に偵察員と
して在隊し敗戦を迎えた。特攻機を漕ながらに送り出し
た思い出を戦後語っている。

7 1945年4月6日の特攻攻撃

第八飛行師団は、4月6日の航空総攻撃に協力するた
め、九州にある師団特攻隊の主力、すなわち前線飛行場
で特攻訓練を行った3隊を使用することにした。

「小林日誌」からはもはや特攻当日の行動はわからな
い。しかし「岡部日誌」によって、かろうじて早朝の行
動がわかる。当日の天候は曇、隊員は朝5時30分に起床
した。「愈々今日熊本を去る、無言のうちに司を去り、矢
島様にも行かず、唯想いのみのこして。黒石より健軍に
来る。健軍八時出発。琉球島に今宵行かん」と。この日
誌はこれで終ります。
母上様 皆様 お元気にて
神国を守ってください」と、最後は結ばれた。

午前10時、新田原において福澤大佐は次の命令を下達
した²⁹⁵。

台飛作命第六号

第八飛行師団命令 四月六日 一〇〇〇

新田原

一、誠第三六、三七、及第三八飛行隊ハ全力ヲ以テ一四、二〇乃至一五〇〇ノ間ニ、新田原ヲ出発シ一七三〇乃至一九〇〇ノ間ヲ期シ沖繩北(中)飛行場西側海面ノ敵輸送船団特ニ大型輸送船ヲ索メテ体当り必碎スヘシ

『戦史叢書』では、この命令下達を〇一〇〇、すなわち午前1時としているが、午前10時が正しい。

ところが悲惨な出来事がまたも彼等の上に降り注いだ。それは、熊本軍飛行場において、三十八飛行隊の田窪力治曹長が試験飛行中に墜落、事故死してしまった(12時55分)。田窪機は飛行場近くの陸軍病院に向かって急降下をやり、引き上げ時機を誤り激突死したという³⁹。彼等の衝撃はいかばかりであったろうか。6日前の2人の殉職に続く、決行直前の死である。

新田原飛行場で攻撃を命令した福澤大佐は、戦後次のように回想し、それは公刊戦史である『戦史叢書』に掲載された⁴⁰。

「特攻隊員の士気は非常に旺盛で、全く敬服に値する人が多かった。操縦技量は一般に未熟で、基本操縦を辛うじて終わった程度であった。飛行機は直協、九七戦等航続力もなく、爆弾搭載量も少ないものが多かった。直協機はすみやかに改装して、燃料タンクを2倍の大きさとし、爆弾は100キログラムを1発搭載するようにした。攻撃要領は、目標から20キロ以上のところで、なるべく山を背にする方向から超低空で接近し、適当な間合いを計って急上昇、急降下し船体の中心部に必中するよう指導した。攻撃要領は通常、攻撃前日に図上で演練した。敵機の妨害、対空火器の損害を避けるため、攻撃時刻は目標の視認可能な範囲内でなるべく薄暮の遅い時刻を選定した。沖繩の地上無線情報により刻々戦果を知ることができた。(中略)特攻隊員は異口同音に必成を誓い、歡を尽くしてあたかもわが家に帰ったように、軽い気持ちで大唱口舞し、何ら悲痛の面影を呈しなかった。いよいよ出撃のときは、恩賜の酒と煙草をいただき、代表者の出発の挨拶に次いで、喜々として機上の人となり、その沈着荘厳な姿は全く神々しかった。出発時の操縦は冷静沈着、正確であって、その持つ技量を十分発揮していた」

果たして、この回想は事実を伝えているであろうか。沖繩北、中飛行場西側海面の敵艦を求めて新田原を飛進した3隊の特攻隊は、沖繩に向けてどのようにして飛行したのか。次に「天号作戦間に於けると号部隊運用並びに戦闘に関する戦訓」(防衛研究所図書館所蔵、以下、「戦訓」)から、彼等の飛行をたどりたい。ここに記された内容は、3隊だけに当てはまるものではなく、特攻隊の状況がよくわかる。

特攻隊員の多くは技量未熟であったため、九州から沖

縄までの夜間洋上航法は、たとえ月明時といえども無理があった。これは当時、もっとも練度の高い搭乗員にとっても困難な任務であったという。このため大部分は薄暮攻撃(日没後20分から40分)に終結した。「小林日誌」でも技量の未熟を率直に認め(2月26日)、また夜間飛行の経験の無いことも認めている(3月9日)。

さらに搭乗した九八式直協機のような老朽機は、増槽、爆装による飛行機重量の増加、編隊航進等により著しく燃料を消費してしまう。このため各機毎に綿密な試験を必要とした。出撃当日に墜落、殉職した田窪曹長機は、まさにこうした試験飛行中であつたと思われる。特攻隊員を送り出す原隊では、どうせ失われる機体なのであるからといって、老朽機を持たせることが多かったという⁴¹。二つの日誌の中でも、発動機の故障や飛行機の不良がたびたび記されていた。

第八飛行師団では、特攻隊出動にあたって多くの場合、その発達飛行場に部隊長自ら臨場し、または幕僚を派遣して、出発、航進、攻撃要領等、細部にわたり指導したという。新田原での指揮官は福澤大佐で、3月31日に新田原に到着している。3隊の特攻隊は3月27日から28日にかけて九州の基地に到着、29日に熊本の隈庄飛行場に展開を完了した。そして旬日を経ずして出撃していった。しかし幸いでもおもうか、3隊は大刀洗陸軍飛行学校で編成された特攻隊である。熊本で待機中、関係者に別れを告げる機会があった。例えば、大刀洗陸軍飛行学校筑後教育隊の助教であった、岡部三郎伍長は同教育隊を訪問(4月1、3、5日)し、また同飛行学校木脇教育隊の助教であった。藤沢鉄之助軍曹(三十七飛行隊)は、出撃の2日前、宮崎県木脇飛行場に飛来し、教え子に別れをつけている⁴²。しかし出撃する新田原飛行場で見送ってくれたのは見知らぬ他部隊の人々であり、初めて見る司令官や参謀たちで、心の通わぬ決別になってしまったと思われる。「特攻隊員の出撃を見送る高官たち、中佐・大佐、そして将官たちが、出撃して行く若者たちの落ち着いた笑みを含んだその顔、その態度を見て、天皇陛下に対する忠誠心から、莞爾として飛び立たと見たのは、自己欺瞞といつてよい」⁴³。

「新田原飛行場より出発せし誠三六、三七、三八、飛行隊の一隊の機数は概ね八乃至九機にして出発に方り相当の混騒を生じたるのみならず空中集合にも又多くの時間を費やしたり」

攻撃部隊の発達順序は、誘導並びに戦果確認機、特攻機の順序である。しかし発達にあたっては、相当の混騒があった。「戦訓」はその主な原因を4点挙げている。

それは、1. 離陸間隔過大。2. 離陸後の場周経路過大。3. 索敵機眼衰弱にして僚機を発見し得ず。4. 欠機ありたる場合前進を開始すべきや中止すべきや等空地連絡法を講じらざる為空中にて混雑状態を呈せる、て

ある。

さらにもう少し具体的に見ると、離陸間隔は前方機が浮上るを目途とし著しく延伸せざるを要す。空中集合に著しく時間を要し且つ既して拙劣なる集合をなすものは離陸間隔の延伸するもの多し。場周経路過大にして僚機を見失い又前方機に注意しあらざる為出動準備の掩護戦闘隊の編隊と誤り集合したる為空中集合の時期を失い帰還着陸せる飛行機あり。空中集合十分ならず主力に稍々遅延したる理由を以て過早に進行を断念し帰還せる特攻機あり、ということであった。

また、出撃までの特機中、飛行機の分散配置さらに特攻機の損害防止のために訓練を中断した結果、出発にあたり危険な離陸をする隊もあった。

発達にあたり、三十六飛行隊の下手機と嶽山機、三十七飛行隊の春島機、三十八飛行隊の宇野機、崎田機、安部機の6機が離陸を断念したものと思われる。その多くは飛行機の不良によるものであろう。結果として、27機が発進していった。

「新田原飛行場を発進せし誠三六、三七、三八、飛行隊の経路は知賀、徳之島を通過することなく其の遙か西方洋上を沖縄に進攻」

そしてこの飛行が友軍機によって目撃されていた。戦後の回想ではあるが紹介しよう。「沖永良部島特攻基地救援の為、百式輸送機で出動した私は、夕陽迫る午後7時30分頃、同島近海上空で(中略)特攻機7～8機の編隊を見ました。(中略)夕焼け雲の下を飛び行くその機影は、少々猫背にも見える九八式直協偵機であり、脚の出たその姿は、申し訳が無いがアヒルの行列の様に、哀れにも見えました」³⁰⁾

「九州方面より沖縄に出動せし直協の特攻隊の一機が高度降下点たる沖永良部島付近に於て不時着陸せるはコックの切換へによるの疑いあり」

これは三十八飛行隊の原田機を指している。特攻機はこれで26機となった。

敵の電探威力圏(250キロ)に入る前に100メートル以下の超低空に移行する。そして敵戦闘機の哨戒幕100キロ圏に近接する前に、間隔5～10キロ横隊または距離2～3キロの縦隊に分解し、高度50メートルで目標に近迫する。航路間の誘導は攻撃隊の分解開始点(船団より50～100キロ)まで誘導することを通常とした(第3図)。

突撃法は、急降下突撃法とする。このため目標の10キロ付近に近迫すれば、逐次高度を上昇しつつ索敵し次いで突撃するものとした。

第八飛行師団の天号作戦初期の特攻攻撃には、ほとんど戦果確認機をつけていた。3隊には木下少尉機(一式戦)が同行した。戦果確認機は攻撃隊の分解開始とともに攻撃隊の後方に移り、戦果を確認するのが通常であった(第4図)。戦果確認機と隊長機は最後まで超低空で執

拗機敏に行動し、全機の戦果を確認しこれを報告する必要あり、というが果たしてそうしたことが可能であったろうか。

沖縄で特攻隊を指揮指導した神彦謀は、第六航空軍と第八飛行師団の特攻用法に対する意見、感想等を次のように記している。

「攻撃時機、方法等も素質、練度等を實際考察の上行はれたかどうか。現地で見たとくころでは極めて疑問に思はれる。例えば弘勢攻撃と云ひ薄暮攻撃と云ふも、その時間巾が大きく、あかるい時刻、くらくらになってからの攻撃が多く、敵機に防護されるか、目標が確認されないかの二途をえらぶ結果となった。(中略)極限すれば実際の航空戦術を無視した攻撃が多く行はれたと云ふ点が多い様に見える」³¹⁾

米軍は日本軍の特攻攻撃に対して早期警戒態勢をとった。それは沖縄本島周辺の遙かな沖合、50カイリ(1カイリ1852メートル)の線に、レーダーピケット艦を配備したことである。北方の第1レーダー哨戒地点から時計回りに16のレーダー哨戒地点(第5図)があり、そこには駆逐艦などのレーダーピケット艦とそれを支援する艦艇が常にいた。その上空には、必ず護衛機が旋回している。駆逐艦には高性能レーダーがあり、飛来する日本機の位置、高度、機数までも性格に探知することができた。それを後方の機動部隊に知らせる。機動部隊はその知らせを受け、航空母艦から迎撃戦闘機を発艦させ、特攻機が本隊上空にこないうちに応戦するのである³²⁾。たとえそこを突破できたとしても、最後には米軍艦艇群が打ち出す熾烈な対空砲火の弾幕があった(写真3～6)。このように何重もの防御網を廻らせて特攻機の攻撃を防いだのである。

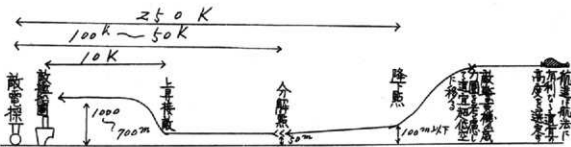
4月6日の特攻機(陸軍82機、海軍215機)の総攻撃によって、米軍艦艇の被害は、空母1隻破損、駆逐艦3隻沈没、同15隻破損、その他の艦艇1隻沈没、同6隻破損で、米軍の小艦艇に被害が多かった³³⁾(第6図)。突入に成功した特攻機は24機、至近弾となった特攻機は5機である³⁴⁾。成功の確率は約12.3%であった。

おわりに

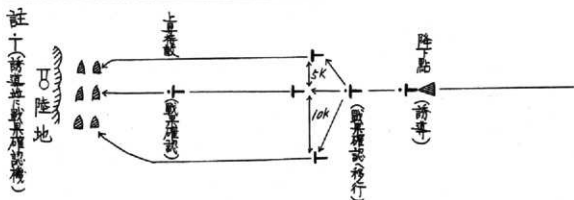
戦果確認の木下少尉が報告したように、26機のほぼ全機が米軍の防御網を突破して突入に成功したのであろうか。また福澤元大佐が戦後の回想の中で、成功率70%(4月1日～6日まで新田原から指揮した総合戦果)と記したのはどのような理由からであろうか。

実際は、戦果を確認するどころか、誰がどのように戦死したのかさきとわからない。敵機に撃墜されたのか、対空砲火に弾みつけて海面に墜落したのか、目標に入ってきたのか、ほとんどわからないのである。「第八飛行師団特攻隊戦果調査表」には、未帰還者26名全員が「残波叩

附圖 側面圖



平面圖



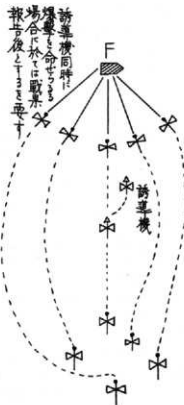
第3図 敵艦船攻撃のための特攻隊航進並びに控散要領 (「天号作戦間に於ける」と号部隊運用並びに戦闘に関する戦訓)

南側海面」とだけ記されているのである。の中で唯一最後の様子がわかったのは、岡部三郎伍長機だけであった。

4月6日の日没(那覇の日没は午後6時50分頃)後約1時間強ぐらいの頃、那覇沖合の「Caswell」号に特攻機がただ1機、突っ込んで来た。あわやという一瞬、機は舷側に激突してこぼれみじんに飛散した。遺体はすぐ艦に引き上げられたが、その額には鉢巻きがしっかりと巻き付けられていた。この血染めの鉢巻きは、米軍人が持ち帰り、戦後遺族に返還された。その鉢巻きの寄せ書きから、岡部三郎伍長の身につけていた鉢巻きであったことが判明したからである。鉢巻きは「岡部日誌」の4月3日にある、筑後教育隊を訪問したおり、教え子たちから贈られたものであった²⁶⁾。命中した特攻隊員の名前と命中された艦名が判明しているのは希有なことである。突入時刻は、「Caswell」号が水平線上にシルエットとして浮かび上がる程度の明るさであった²⁷⁾。

この「Caswell」号は車両人員揚陸艇14隻、軌道揚陸艇8隻が搭載可能で、その他物資も多量に搭載できた、水陸両用戦用輸送船である。海兵第6師団の揚陸にかかわっていた。4月9日に修理と補給のために沖縄を離れ、パールハーバーに向かった²⁸⁾。

陸軍前橋飛行場で特攻訓練を行った36名の隊員のう



第4図 誘導機の戦果確認



写真3 米艦船デュレイギ号により撃墜された日本軍機、海面すれすれに飛行機が見える。1945. 4. 6、慶良間 (沖縄県公文書館所蔵)



写真4 特攻機の攻撃で炎上するガソリンを満載した上陸揚舟艇。1945. 4. 6、慶良間 (沖縄県公文書館所蔵)

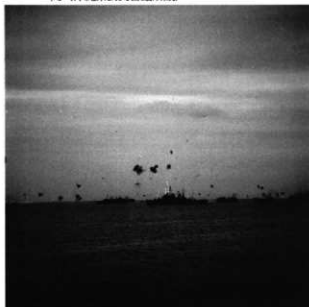
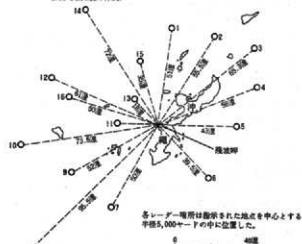


写真5 海面すれすれから攻撃してくる日本軍機に対し、高射砲とロケット弾幕で対応する米艦船。チャンデラー号より撮影。1945. 4. 6、慶良間 (沖縄県公文書館所蔵)



写真6 写真5と同じ (沖縄県公文書館所蔵)



第5図 レーダービームの位置 (『戦史叢書』より)



第6図 4月6日の主な日本軍機の攻撃地域 (『戦史叢書』より)

ち、特攻戦死者は、4月6日の26名、16日の2名、27日の1名の計29名であった。特攻に出撃しなかった7名の内訳は、三十七飛行隊3名、三十八飛行隊4名である。三十七隊の2名は、3月31日午後4時20分、熊本県隈庄飛行場において、僚機の地上滑走中プロペラに接触事故死している。1名は飛行機の故障で中止したものとと思われる。三十八隊4名のうち1名は4月6日、熊本健軍飛行場において試験飛行中、墜落事故死している。1名は4月6日に出撃したが沖永良部島に不時着、生還している。2名は飛行機の故障で出撃を中止したと思われる。

最後に3隊が新田原飛行場を発進した時刻を検討しよう。

「台飛作命第六号」による「一四、二〇乃至一五〇ノ間」、さらに命令を下した福澤大佐の戦後の回想等から、これらに記された時間が公式記録として採用されてきたものと思われる。最近でも村岡英夫著『陸軍特攻の記録』(2003)年の中に同時刻が採用されている。

しかし、突入当日の健軍飛行場における突然のアクシデントや「戦訓」に記された出発時の相当の混乱等を考えれば、命令通り実行されたとは到底思われぬ。さらに隊員が搭乗した九八式直協機(最高速度348km/h、ただし増槽・爆装による飛行機重量の増加等により減速)、沖永良部島近海上空での目撃時刻、そして同部隊の突入時刻から判断すれば、『戦史叢書』の採用した午後2時30分ころではなくて、午後5時25分が正しいものと思われる。もちろんそこには時間幅がある。

福澤元大佐は、前途有為の若者たち突入命令を下した自責の念からなのか、あるいは参謀としての自尊心からなのか、突入時間(16時15分ころより相次いで沖繩地上勤務部隊の戦果報告が戦訓指揮所の対空無線に入ってきた)³¹⁾、これが誤植でなければ)一までも恣意的に伝えた可能性がある。実際のところ、高度降下点である沖永良部島を過ぎてからは、もはや洋上の敵艦船の艦艦識別はおろか目標発見もほとんど不可能な状況ではなかったろうか。

本稿執筆にあたっては、数々の資料提供とご教示いただいた深井正昭氏、入口健太郎氏に厚く御礼申し上げる。さらに久部良和子氏、内藤真治氏、花井良夫氏からもご協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。

今回は事実関係をできるだけ明らかにしたい思いでまとめてみた。誤りあれば、ひとえに筆者の責任である。ご指摘いただければ幸いである。

本稿は平成16年度職員自主研究の成果の一部である。

註・引用参考文献

1) 攻撃命令を発した福澤大佐の戦後の回想では、「出動機は14時20分より15時にあたり各隊それぞれ3編隊となって特攻に出撃した」と

している。「新田原方面8FDの神隼特攻」『陸軍航空の軌跡(2版)』

- p.272-275、1979年
- 2) 『第八飛行隊特攻隊戦果調査表』(防衛研究所図書館所蔵)。上記の書では「火柱5(木下少尉は7)」としている。
- 3) 『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』p.308、防衛庁防衛研究所戦史室、1970年
- 4) 内藤真治『現在を問う』p.59-65、1987年、に収録されている。
- 5) 深根道義『特攻の真実』p.197、2001年
- 6) このあたりの経緯については、八原博通『神隼決戦』p.128-131、1972年、に詳しい。八原は当時第三十二軍高級参謀であった。
- 7) 入口健太郎氏提供の『小林敏男遺稿日記』全18頁
- 8) 『本土における陸軍飛行場要覧 第一復員局』(防衛研究所図書館所蔵)
- 9) 深井正昭『戦36、37、38特攻隊員の寄せ書きについて』『会報特攻』第20号、p.22-23、1997年
- 10) 『前編陸軍予備士官学校戦記』p.63、1980年
- 11) 『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』p.309、防衛庁防衛研究所戦史室、1970年
- 12) 『台湾沖合い甲第百二十三号其ノ二』『天一号航空作戦戦訓詳報附録(其ノ二)』(防衛研究所図書館所蔵)
- 13) 入口健太郎編著『蒼天に紅の血は燃えて』2002年、所収の『同部日記』p.204-206も参考とした。
- 14) 泉原達三郎『大刀洗飛行場物語』p.109、1981年
- 15) 泉原達三郎『大刀洗飛行場物語』p.77-107、1981年
- 16) 『天号作戦間に於けるト号隊運用並びに戦訓に関する戦訓』(防衛研究所図書館所蔵)
- 17) 『神隼基地の航空特攻に関する戦史資料』、これは沖縄で特攻隊を指揮指導した、神直道元中佐の1957年4月の記録。(防衛研究所図書館所蔵)
- 18) 『八飛隊 特攻隊死亡通報録』(防衛研究所図書館所蔵)
- 19) 『天一号航空作戦戦訓詳報附録(其ノ二)』(防衛研究所図書館所蔵)
- 20) 『防衛研究所図書館所蔵』
- 21) 『天一号航空作戦戦訓詳報』(防衛研究所図書館所蔵)
- 22) 福澤丈夫『新田原方面8FDの神隼特攻』『陸軍航空の軌跡(2版)』p.272-275、1979年
- 23) 原勝洋『真紅・カミカゼ特攻』p.117、2004年
- 24) 村永良夫『知覧特別攻撃隊』p.54-55、1992年。知覧特攻平和会館には、高橋勝見曹長(三十八飛行隊)の遺書、さらに4月6日午後1時、出撃直前にしたためられた石川寛一軍曹(同)の遺書も展示されている。
- 25) (防衛研究所図書館所蔵)
- 26) 『八飛隊 特攻隊死亡通報録』(防衛研究所図書館所蔵)。入口健太郎編著『蒼天に紅の血は燃えて』p.190-194、2002年
- 27) 『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』p.446、防衛庁防衛研究所戦史室、1970年
- 28) 深根道義『特攻の真実』p.281、2001年
- 29) 『産経新聞』1996年8月14日付
- 30) 深根道義『特攻の真実』p.271、2001年
- 31) 島山幸次『青航一期生岡部三郎君特攻出撃のこと』『会報特攻』第24号、p.7-8、1995年
- 32) 『神隼基地の航空特攻に関する戦史資料』(防衛研究所図書館所蔵)
- 33) 平賀克己『戦艦艦二突入』p.39、2002年
- 34) 『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』付表第六、防衛庁防衛研究所戦史室、1970年
- 35) 森本忠夫『特攻』p.260-261、1998年
- 36) 録音きは、現在知覧の特攻平和会館に展示されている。その他、岡部伍長にかかわるものとしては、熊本市内の司茶館宿泊中に描かれた曹長の絵、短尺、仏像の彫刻などが展示されている。
- 37) 磯部 巖『特攻隊員の録音』『朋友』11月号、p.46-48、1984年
- 38) 花井良夫氏提供資料
- 39) 福澤丈夫『新田原方面8FDの神隼特攻』『陸軍航空の軌跡(2版)』p.274、1979年



写真1 御仮殿



写真2 御戸開祭 鹿卜神事



写真3 御戸開祭 御機織神事



写真4 御戸開祭 御衣廻四方拝神事



写真5 仮殿遷座 真御柱御刺奉遷



写真6 不明門



写真7 御戸開祭不明門開門(御先欝御神幸)



写真8 仮殿遷座 御羽車遷御

見える二棟並立の本殿であることを考察した。また兩殿建立地は、専玉殿は現本殿建立位置でなく旧觀音堂跡、また借玉殿は古米変化することなく現遷宮の仮殿建立地とした。

(三)では、現行の式年遷宮の諸神事を紹介、式年遷宮が貫前神社一大祭典の御戸開祭に逆行されてきたことの意義、これに併せて御戸開祭諸神事の中には、我が国の祭祀を考える上で貴重な神事が行われている事も考察した。また一連の神事の中に同社の遷宮の古態性を今に伝えている神事があることも考察して置いた。

何れにしても、貫前神社式年遷宮は、古代において必ずしも多くなかった式年遷宮の制度を今に伝えている。その貫前神社で、少なくとも平安時代から連綿と式年遷宮が逆行されているという事実を知るものが少ないのは残念である。

貫前神社式年遷宮に関する拙稿が、同社式年遷宮の重要性を一人でも多くの方に理解をいただく為の一助になればと願っている。

(平成十六年十二月貫前神社式年遷宮祭事仕務稿)

註1 「(一)野田一之宮貫前神社式年遷宮考(二)一式年の遷宮について」(総持重明生遷宮日記 全論集 考古集 二所収 二〇〇二年)

(三)「上野田一之宮貫前神社式年遷宮考(二)一遷宮の儀について」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 二〇〇四

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 二〇〇四

註2 昭和五十五年式年遷宮祭事(一)之貫前神社 昭和五十五年

註3 註1(2)の拙稿に紹介している。

註4 床下祭祀を伝えている箇所がある。

註5 四の「御戸開祭諸神事」6の「オケホケ神事」参照のこと。

註6 群馬県教育委員会 昭和五十三年

註7 「一之宮貫前神社所蔵」富岡市史 近世 通史編・宗教編(富岡市 平成三年)に所収されている。

註8 榎子樹之進「神社祭典研究叢書」(儀礼文化)創刊号 昭和五十六年

註9 日本祭礼行事成行会編「日本祭礼行事成行会 第四巻」早稲社 昭和四十六年

註10 「神道大系」神社編、美濃・飛騨・信濃編(財)神道大系調査会 昭和五十八年

註11 「群馬県史資料編四」(群馬県 昭和六十年)による。

註12 「発見された日本列島—2004新発見考古学選集」(朝日新聞社 平成十六年)の青谷寺地蔵跡の説明による。

註13 1 神衣男「弥生時代、古墳時代および奈良時代のトケ・ト甲について」(戦国史学第 三十八号 昭和五十一年)

2 新保田中道跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書第一七六集 一九九四年)

註14 三橋 健「四内神名帳の研究」(研究稿) (京風社 平成十一年)

註15 榎井勝之進「伊勢神宮(改正新説)」(学生社 平成十年)

註16 文化庁文化財保護部編「民俗学選集十三」(財)国土埋蔵文化財調査事業団 昭和五十九年

註17 「一之宮貫前神社所蔵」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和五十九年

貫前神社所蔵本は神道大系記載「四内神名帳」に所収されている。

註18 尾崎喜左衛門「貫前板野両神社の研究」(上野田の遷行と文化)尾崎喜左衛門行状 昭和四十五年)

註19 拙稿註1の(2)論文

註20 皇朝祭祀行状 昭和二年

註21 「新訂増補国史大系(普及版) 日本書紀前編」(吉川弘文館 昭和四十九年)

註22 「新訂増補国史大系 延喜式(普及版)」(吉川弘文館 昭和五十年)

註23 同右

註24 友成道信著「貫前神社年中御祭典行事私記」による。「日本書紀」巻一「神代上(四神出生)の一書」に「是の時に雷等響起りて道ひ、時に道辺に大きな輪石有り、故に伊弉諾其の輪の下に跪く様なり」と見える。

註25 井上充夫「貫前神社の本殿と仮殿」(後編)「日本建築学会論文報告集」第二〇四号所収 昭和四十八年二月

註26 同右

註27 尾崎忠男氏所蔵「富岡市史 近世 通史編・宗教資料編」(富岡市 平成三年)に所収されている。原本は、現在群馬県立資料館に寄託されている。

註28 同右

註29 鶴島聖次 昭和五十五年

註30 岡田米夫「式年遷宮の本義」(第二六一)同神宮式年遷宮記念遷宮論集 神社本庁 平成七年

註31 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「研究紀要」(二) 平成十六年

註32 「第六十一同神宮式年遷宮記念遷宮論集」(神社本庁 平成七年)

註33 註1に同じ

遷宮といえは神遷しをすることであるが、それも神社を造替するに当つて、一時的に仮殿に遷座し、いよいよ造替成つて正殿に神遷しをすること、すなわち神殿造替のための遷宮と解するのが一般のやうである。

と述べたうえで、千葉県、奈良県、京都府等に鎮座する神社の祭を考察、遷宮は「神遷を遷し奉る」と、「遷宮は宮を遷すのでなく、神遷を遷すのである」ことで、必ずしも造替をするために行はれるものではないと論じている。

買前神社御戸開祭御先私神事及び御衣の御神幸神事は、如上で論じた如く買前神の御神幸であり、買前神の神遷を遷す神事と考えられる。「上野国交野実録」に見える買前神社建物群中の「専玉殿・借玉殿」が私が論じた通りとすれば、冬・春両度の御戸開祭御神幸そのものは、原田氏の云う「神遷を遷す遷宮」で専玉殿から借玉殿、借玉殿から専玉殿への買前神神遷を遷し奉る遷宮の神事であり、そこに買前神社本来の祭祀を見ることが出来る。

年々御齋行される御戸開祭での買前神を遷し奉る事が、専玉殿・借玉殿両殿を年々の造替でなく何年(式年)かに一度の造宮にした時に、それに伴い式年遷宮が行われようになつた。買前神社の場合は、当初三十年毎に両殿の造替が行われ、それが中世に七年ごとになり、近世以後は三十年毎となつた。しかも齋行する年の干支は、古代・中世は「寅年・申年」とし、近世以後は「申年」に式年遷宮が行われることとなつた。

三十年・七年毎の式年遷宮から十三年毎に変化した時、造替は行われず本殿の清掃・修理等による遷宮となつた。しかし、式年・造替に変化はあつても、式年遷宮の日時は、年々歳々に行われていた買前神の神遷を遷し奉る祭日の御戸開祭当日に遷宮を行うことは変化がなく齋行されてきた。本項目頭で述べた如く式年遷宮年の御戸開祭は、式年毎の大御戸開祭であることを改めて指摘できる。

御神幸神事とともに、御戸開祭の御神事となる「鎮神事」も買前神社本来の祭祀に関係することが考えられる。御鎮神事も「専玉殿・借玉殿」の両殿との関係が考えられることは、三項で既述した通りである。

御鎮神事の場所は、春・冬の御戸開祭では異なる(図2参照)。春の神事は、蓬ヶ岡の群馬県立社会教育館東にある鎮塚(春の鎮塚・東の鎮塚、古式の円墳

か?)、冬の神事は神社北方の高蒲橋の高田川右岸に接した民家の中にある榎木がある地(冬の鎮塚・北の鎮塚、丸塚跡と伝えられているので古墳跡か?)で行われる。両鎮塚は直線距離にして三六〇mである。

御戸開祭の鎮神事であれば、一個所の鎮塚でも神事は可能である。二カ所の鎮塚があるということは、春・冬いずれの鎮神事を見ても差異はみられないので、各鎮塚で行われる事に何か理由があるのであろう。

これに関しても私は、註1(2)の拙稿で御神幸神事同様、春の鎮塚(東)神事は借玉殿、冬の鎮塚(北)神事は専玉殿との関連神事であるがために二カ所の鎮塚となつた事を論じて置いた。その神事が御戸開祭終了後の過神・悪霊等を遷る神事であることは、三項にて論じたとおりである。何れにしても、この神事を以て御戸開祭は終了する。

七、結語

買前神社の式年遷宮について、同社の最大の祭典である御戸開祭当日に遷宮が齋行されることを諸史料を通じて論じてきた。併せて御戸開祭諸神事も紹介、考察も加えてみた。如上の通り、買前神社の御戸開祭に関わる諸神事は、鹿占神事、御機織神事、オケホケ神事、御鎮塚神事等我が国の祭祀を考ふる上で貴重な神事が今に伝えられ、齋行されてきた。これと併せて式年遷宮も式年の変遷はあるものの、頑なに齋行されてきている。

その式年遷宮は、今年平成16年十二月の冬の御戸開から17年春三月の御戸開祭にかけて、仮殿遷宮と本殿遷宮が齋行される。

私は、今回の遷宮を目標に「一之宮買前神社式年遷宮考」と題して、(一)が「式年の変遷について」、(二)が「造替の建物について」、(三)は本稿で「遷座祭と御戸開祭について」と考察を行ってきた。

(一)では、式年の変遷が三十年から七年、更に現行の十三年に変化したも、それが頑なに「寅年・申年」に行うことを護ってきたことを考察して置いた。(二)では、「上野国交代実録」に見える三十年毎の式年造替の建物にみえる「専玉殿・借玉殿」の両殿は買前神社の本殿で、「借玉殿」は従来指摘されているところの「専玉殿」造替のための仮殿ではなく、両殿は我が国の古社に

遷宮祭即神嘗祭であった。

即ち、遷宮というのは神嘗祭の一部であつて、先ず新宮を造り、ここに大神を迎え奉る儀式があり、しかる後に神嘗祭を行うことによつて、完結を見てゐるといふ。この事は、日時からすれば遷宮祭と神嘗祭は祭儀上からは全く同一のものといふ。この関係は、宮中で行われている大嘗祭と新嘗祭の関係にも置き換えられるといふ。新嘗祭は、毎年一度行われ、一世一度の新嘗祭が大嘗祭であるといふ。要するに、毎年の新嘗祭には、そのたび毎に新嘗殿である大嘗殿は造られないが、一世一度の大嘗祭には、新嘗殿を古式の通り新造したように、伊勢においても式年の神嘗祭には神嘗殿の宮を新造し、そこで神嘗祭を行うことになつたといふ。神宮の式年遷宮が、二十年ごとの大嘗祭であることには変化はないのである。

貫前神社の式年遷宮も、貫前神社の年毎の例祭である御戸開祭に敷衍されることにその意義がある。貫前神社の場合、神宮と異なり遷御の前に御戸開祭が行われているが、御戸開祭当日に式年遷宮が行われている事実には変わりはない。この事は、神宮の式年遷宮が二十年毎の大嘗祭であるなら、貫前神社の式年遷宮も十三年毎（かつては七年毎、三十年毎）の大御戸開祭と指摘出来る。

式年遷宮年の貫前神社御戸開祭は、遷御の神事の前に敷衍される。しかし大御戸開祭故に例年の御戸開祭で一部簡略化されて敷衍されている神事が、式年の祭では古式のまゝに敷衍されて来たと考えられる神事がある。その一つが御先私神事であり、二つ目が御衣の御神幸神事である。

例年及び遷宮の御戸開祭御神幸コースは、
① 現行御戸開祭御神幸コース

・ 御供所—勅額鳥居—不明門—旧参道を西へ—総門—下り石段—随神門—押殿—本殿

② 遷宮当日御戸開祭御神幸コース

・ 御供所—勅額鳥居—不明門—旧参道東へ—御女郎坂—国道二五四線西へ—本殿（県道鳥居—一之宮懸—鳥居—総門—下り石段—随神門—押殿—本殿）

である（第2図参照）。

①のコースが、通称「遷ヶ岡」と称されている台地上と本殿とのコースであるのに対し、②のコースは、台地上から坂を下り、平坦地を通つて坂を上り本殿に行くコースとなつてゐる。②コースで台地から下る御女郎坂は、貫前神社の古い参道との伝承がある。また、台地へ上る現参道（県道鳥居—一之宮懸）の西側には、御女郎坂同様の古道があつた。古道の一部は、現在でも確認できる。この事は、②コースが本来の御戸開祭神事の御神幸コースであり、①コースは省略化されたコースと云うことが出来る。

簡略化された時期は明らかにしがたいが、少なくとも②コースは簡略化されない本来の御神幸コースを、また貫前神社の古い祭祀の形を伝えているものであることが考えられる。

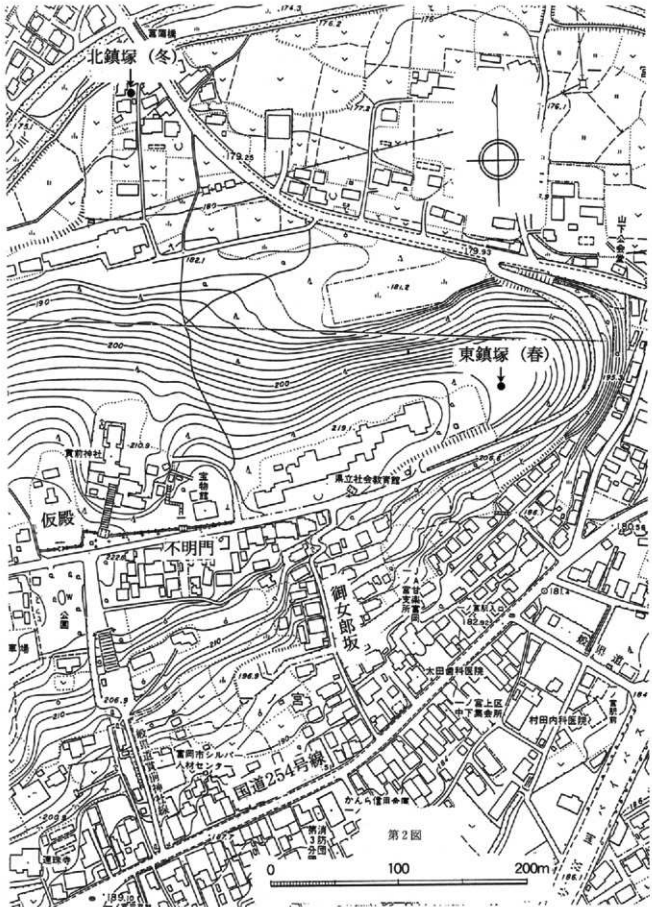
これに関して私は、既に拙稿「上野国一之宮貫前神社式年遷宮考（二）—造替の建物—」において、遷宮時の御戸開祭御神幸コースは「上野国交代実録帳」に見える貫前神社の本殿と見られる「専玉殿—借玉殿」の両殿と関連があり、式年遷宮時の御戸開祭御神幸コースが、式年遷宮に関わらず御戸開祭本来のコースであつた事を論じて置いた。その主旨は

① 専玉殿・借玉殿の両殿のうち借玉殿は遷宮の爲の仮殿でない。
② 両殿は、何れも貫前神社の本殿であり、二棟が同一台地上に並列して建立されてゐた。
③ 並列の状況は、専玉殿は旧観音堂跡現宝物館建立地、借玉殿は現行遷宮仮殿建立地（撰社日枝神社前）である。

④ 御戸開祭の御神幸は、春は借玉殿から専玉殿、冬は専玉殿から借玉殿の御神幸であつた。
⑤ 御神幸コースの坂道である東の御女郎坂を上つた所に専玉殿が、西の坂を上つた所に借玉殿があつた。

⑥ 貫前神社式年遷宮は、専玉殿から借玉殿、借玉殿から専玉殿が三十年式年で行われた。
⑦ 現行御神幸コースは、現在地に本殿が建立された以後のコースである。

原田敏明氏は、「祭典遷宮」で



御通り前後へ為持申候。御用相動候者は一同白布二而目隠し致候。尤兩家へ供頭茂木氏と同様目隠し為致候。兩家は櫓木より火をもみたり、其火を以飯をたき、行水を致し七日之間晝夜深斎、婦人は勿論深斎不致者より更に二対面不致一間二引籠り衣類を初めなへかま其外夜具盤等二迄迄都而新二致申候。火をもみたり候二〇若もの五七人も無之而は〇なりふ申。是は下社家〇〇〇致〇〇何れも七日之〇〇〇。

また同史料付箋に

一、御神秘之義は一子相伝にて〇〇兄弟たり共一切詣候事不相成。嫡〇たり共御用相動候節御上段え上り候時二無之ては伝不申。依之早世儀致候得は神秘家二たえ申候。其節は兩家之内より相互二伝候事二文禄元年二書付取成申候下社家儀は輕き御役動候にも一同神文を取、燈消候後之義は親子兄弟たり共一切語り不申事二相定置候。別て御神体之御供は兩家之外更に二候者無之一子相伝不成類御動事二御座候。以上。

飯たき水くみまで〇〇〇〇其外提灯持陸尺等二至〇〇〇〇方二召連候者一同深斎致〇〇〇〇供方へ大小上下等迄都而新〇候事。又下社家并供方之者ハ火くち火にて深斎櫓木火は兩家斗二候事。兩家へ着服はじばん帯等二至迄不残白衣但シかり衣差買等は白麻二而仕立申候。何レ之間二候共兩家之装束着相動成候。

下社家共は色付之装束着致成候。奉供之節はわらじはき申候。衣類わらじ儀持候二も何レも深斎之上仕立申候。

御幸濟七つ時分七つ半頃迄二首尾能退出、且出動退出之節兩家之下社家一同平伏、其節奏者祝尾崎退出之御太鼓を打候与直二退出、夫より大宮可退出之御太鼓を打則大宮司退出、兩家之出動退出之節御太鼓打候は兩家之退出宮中へしらしめんかため也。

一、妻子并二供方之者御幸を拝し候二御本社与御拝殿之〇御渡殿へ下夕御玉垣之内江相詰奉拜候。其節彼之御場所江幕張申候。尤尾崎上之大宮可下にも候事。

右奉供之節動方并二供連等迄大宮司と同様二候事。

一、御小座敷十二月廿二翌二日。

右幕四つ時出動、是は御遷宮より一日前二候事、御上段江登り明晩御神鉢被受候、御用意致置也。外二別段御用向無之事故〇〇退出、且出動退出之節兩家之下社家一同平伏、奏者祝尾崎退出之御太鼓を打直二退出、夫より大宮司退出之御太鼓を打是又直二退出、且又供廻り之義は五日〇〇提灯無之、其外は明晩之〇〇召連相動可申事とある。

また、吉井藩士藤島高堅が書き記した「勘高堅日記」の寛政元年（一七八九）二月九日には、この年二月に齎行された本殿遷座祭の様子が次の如く記されている。

天明九年己酉二月三日年号寛政と改元（中略）。同年二月九日一ノ宮御遷宮に付き参詣に行く、（中略）夜に入り社壇へ着き持着け平七より申し通し置き、内陣迄上り拝兵、夫より拝殿に並び居り、飯宮より社入宝物を持ち通る所を拝見公儀其の外よ納める所の太刀、鏡夥数あり、諸家よりの文通並びに手鏡など有り、就中常憲院様より御納めの品多し、金屏風一双、絵は古法眼也という、てうつがい滅金かな具にてせし物也、四ツ時頃宿へ帰り八ツ時頃御遷宮也、火を消すべしと触れ来たる、依て邦之助殿と御宮へ参りしが、群衆ゆえ漸く門際まで行く、火は残らず消し、下に居るべしと呼びあるき、又眼をふさぐべしと呼ぶ、御通り筋か割竹にて地をたたく音喧しく聞え、御飯宮の方にて大音に御升堂と一し声呼び、鉦の音の如き物をうち、程無く御遷宮済みしか騒ぎ立してし故宿へ帰る、しかも淨間の中で齎行されている。

六、御戸開祭と式年遷宮祭

伊勢神宮の式年遷宮は、内宮・外宮の両宮とも神嘗祭の由貴の大御饗祭に行われていた。即ち現行に至るまでの式年遷宮は、外宮は九月十五日の亥刻、内宮は十六日の亥刻に遷御、それが終わって由貴の大御饗が行われている。現行の遷宮祭は、天皇の御裁可のもとに日時が決められて齎行されているため遷宮祭が早く行われ、その上に別にに神嘗祭を行っている。しかし現行に至る以前は

同戌之日夜押詰、御神事六人家務之

とある。

御戸開祭に関する史料は、如上以外確認していない。

次に、御戸開神事当日に行われる遷宮については、如上史料の「御社頭并御本地仏勅向書上帳」に次の如く書き記されている。先ず御仮殿の上棟について

一 御仮殿御上棟十三年

巻度

十一月之勅向吉日を撰任候。ひる正八つ時出勤七つ半頃船宮仕候。供頭
 旁人添供志人、侍駕籠脇共六人、徒三人、押式人、同心四人、鐘先箱長
 柄等そへ可持、御仮殿御門の地なく□□左り方え駕籠付此処にて下乗詣
 所江相越申候且下社家共一同二家来徒侍供頭迄何レも麻上下着候二付、
 両家者長袴着仕候今日之席



右御上棟勅方并二供連共之大官司と同様ニ御座候。□動不同退出大官司

□尾崎先ニ御座候

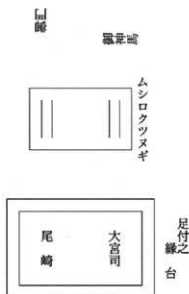
とある。

御遷宮についても同史料に

一 御遷宮十三年ニ志度申年十二月申日翌西之二月申日、古へ八寅年申
 年七年ニ有之候。右夜七つ時より七つ半過迄ニ退出奏者志人、外下社家
 七八人より拾人位迄其外高張挑灯八張、筋提灯六張、弓張提灯八張、内

式つ押之提灯、大刀持志人、供頭志人、徒四人、侍駕籠脇共都合八人、
 押式人、同心六人、先箱長柄鐘等迄可持、御惣門之地□□□□、左り
 之方之駕籠付、此処ニおいて下乗、夫より御所江江罷出ル、其時尾崎出
 勤之御太鼓を打、夫より御膳換出候。御供所御臺所より兩家一所へ出ル、
 尾崎左り大官司右ニ而并寄行申す候。不明御門より両家共々御神馬之御
 手つなを持凡式三間持申候。夫より下社家為渡申候。夫より御惣門前
 ニおいて両家縁臺□□□□手を洗□□。

次に御神馬をき□□□□身き□□、座左二



身きよ免のちに手ふき共二四つ足之高臺へのせ両家之奏者役之ものと并持
 参之両家之前へすえ申候。水井ニ清免の鼓は奏者祝持参致也。身清免相
 濟、御本社へ出勤是迄は家来共一同召連申候。夫より御殿を勸免御殿中
 半二下内陣中御内陣之御とひらを聞き追々御幸之御用意正八つ時と相
 成、御社内は勿論町迄一同火をしめし無異目をとち、御本社より御仮
 殿迄御通り筋へむしろを敷也。其時二至而両家、御上段江登り、御神体
 之御供仕御仮殿、御幸、且又、御幸之、御先□御大刀、御内座持参是は
 両家之侍共之勤る御役也。社役人大祝は、御きちやうを持其外之下社重
 立候者御まんを持其余之下社家一同、御ひやう風(屏風)を持右之御ま
 ん御ひやう風之内、御過被過御跡より御供仕候者ハ両家之供頭茂木氏
 斗二候事。但シ御きちやうハ両家御上段よりおまかし社役人大祝江相越

て次回御戸開祭で撤下された後、新たな神輿が供されるのが慣例であった（現在は、外陣に供されている）。

神輿が供される内陣・外陣は、井上充夫氏の貫前神社本殿と式年遷宮の階建立される仮殿建築の考察によれば何れも本殿下層内陣・下層外陣であるという。更に同氏は、この本殿内陣・外陣で斎行される御戸開祭の形式から、本殿と祭祀の關係について古い時代には本殿の下層（床下）が通常の礼拝・祭祀・供饌などの祭祀の主な場所であったとしている。即ち、神社創立の時には、先ず「神の住居」として人間の住居と同じ単層高床の神殿が建てられ、次に礼拝・祭祀の場所として、神殿の下層（床下）を利用するようになったのであろうとしている。これは、仮殿の下層も同じ目的に利用されたとしている。

井上氏が考察した如く、貫前神社の御戸開祭が本殿下層即ち床下で斎行されていたとすれば、これは祭の古い形である床下祭祀（庭上祭祀）を今に伝えていた事となる。床下祭祀は、幕間では伊勢の神宮と滋賀県大津市鎮座の日吉大社と聞く。御戸開祭は我が國の祭祀を考える上で貴重な神事を伝えていたといふことになろう。

五、諸史料に見える御戸開祭

御戸開祭に関する史料は以外と少なく、如上に掲げた史料の他に下記史料しかない。

1 御社頭并御本地仏動向書上帳

記述年代は不詳。貫前神社旧社家尾崎家の者によって書き記されたものである。

記述内容からして嘉永年間頃に書かれたものと推察できる。
最後の大神日の記述で

右、元録（ママ）巴來之勤□□前之通ニ候事

とあるので、その内容は元禄年間（一六八八—一七〇三）から引き続いて行われていたものを書き記したものと考えられる。

御戸開祭は、本史料二月申之日の項に

とある。

2 嘉永七年 年中行事

1と同様旧社家尾崎家の者により、尾崎家の手控えとして書き留められたものである。内容は再三加筆されている。最終の加筆は明治十六（一八八三）年である。本史料二月十三日の項に

初申夜五ツ時、御戸開御神事、且三日上町夜より斎齋ヲ致

御奏役 峰岸榮後正

社家 田嶋 伊織

同断 上原 左近

續先箱番笠其外高張等数本持ス、且惣供行列ニ行真先露弘立

夜五ツ時より四半迄奏者老人外下社家三人供頭老人刀持老人徒老人持駕籠器共都合五人押老人同心三人高張提灯六張箱提灯四張内志張は押之提灯其外□挟箱長柄等迄為□□罷出御惣門之□ふく□入り左之方召駕籠□□此処ニおいて下乗。夫より御供所江罷出ル其時尾崎出動之太鼓を打夫より御膳指出し御供所御臺所より両家一所二出ル。尾崎左り大宮司右二而一齊歩行申候。不明御門よ両家共御神馬之御手つなを待凡貳三間持申候。夫より下社家二相渡申候。夫より御惣門之前において両家縁臺之上ニ座候。手を洗身をきよめ次に御神馬をきよめ申候。但し身きよめの席左ニ身きよめのちに手ふき共に四ツ足之高臺への上向家之両家（ママ）之奏者役之者并持参両家之前江す申候。四ツ足之高臺は鹿ト之節御肴をせ候臺ニ御座候。水井清めの祓は奏者祝持参致候。身清め相濟み御本社□出動是迄は家来一同召□申候。夫より御鼓を動御威□中半二下御内陣中御内陣之御とひらを開七十五膳之御膳を献夫より退出仕候。且出動退出之節両家之下社家一同平伏且又出動退出之節奏者祝太鼓を打。但し尾崎退出之御太鼓を打直ニ尾崎退出。夫より大宮司退出之御太鼓を打直ニ大宮司退出。

右今晚方并供連共大宮司と同様ニ候事。

い知ることが出来る。

7 鎮神事

本神事は、御戸開祭のゴとなる神事である。注連張神事に始まる御戸開神事も、この鎮神事で終了する。本神事は、如上で述べた如く一切が口伝秘事となつてゐる。

公開をはばかりたいが、栗田寛が著した「神祇史料考考」(注20)に「旧権宮司井上正香記」として、神事の一部が、

同(二月)戌日鎮神事、十二月戌日ニモ之ヲ行フ。先梅枝ヲ以テ杖ヲ造リ、之ヲ久那斗ト名ツク。祢宜以下六人、各ニ本ツツ之ヲ携、夜丑刻バカリニ、草履ヲハキタルママ、押殿ニテ神拜シ、階下ヲ下リ、各同音ニ根ノ圃底ノ圃へ鎮リマセト云ヒテ、社西ニユキ、同右ノ如ク唱エ、社北ニテモ同唱エ、社東ニテモ同唱、各杖一本ツツ玉垣ノ内へ投入、ソレヨリ社ノ東南、松林ノウチナル鎮塚ト云ニイキ、同四方ニテ右ノ如ク唱エテ、杖一本ツツ投ゲオキ、ソレヨリ神主門前ニ行キテ右ノ如ク唱エテ、又杖一本ツツ投ズ。此夜社人ハ更ニモ云ハズ、里中ノ者神事ノハジマラン頃ヨリ、言ヲ発スルコトナシ。又コノ夜、右神事ヲ務ル者ニ違フヘバ、必凶事アリト云テ、人々甚恐ル。

と記されている。

これ以上の本神事に関する内容は不明である。

神事で使う「久那斗」は、「来名戸祖神」(くなどのさえのかみ)また「久那斗神」(くなどのかみ)の「くなど」か。同義であれば、来名戸祖神は、「日本書紀」巻一神代上四神出生章第九の一書に「来名戸之祖神」、久那斗神は「延喜式」の「道賀祭祝詞」に「久那斗神」とみえる。来名戸祖神は、黄泉國の雷神の追跡を避るために伊弉諾尊が投げた杖が化した岐神(よなどのかみ)のものとの名であるという。また久那斗神は京城の四隅、村堤、辻等で過神・悪霊等の進入を遮り塞ぐ神という。

本神事の中で梅枝の杖を投げる事、神社の門前(南)、西、北、東、鎮塚の四方で同様杖を投げることは、如上の神の性格からすれば神社の東西南北よ

り来る種々の禍災を除く神事ということになる。梅枝の杖は、その禍災を除くための神具といえる。

また「根ノ圃底ノ圃」と唱して神社の西、北、東にて久那斗を玉垣内へ投げ込むのは、「延喜式」の「六月晦の大詠」に「根圃底之圃尔坐速佐須良比咩登云神、持佐須良比失氏牟」とある詞に同じであり、この詞を唱し、久那斗を投入することは、御戸開祭祭典終了後の全ての罪、穢を祓い清め、鎮める神事と考えられる。

鎮神事は、春と冬の御戸開祭では神事を行う鎮塚が異なる。同じ祭りであれば一つの鎮塚でよいと思われるが、春は神社の東南にある春の鎮塚、冬は神社の北にある冬の鎮塚と異なつた二箇所で行われる。

この事は、各々の鎮神事に意義が求められるのではなからうか。前述しているが如く平安時代の貫前神社には、本殿の性格を持った専玉殿・借玉殿の建物二棟があった。推測の域はでないが、春の鎮神事は借玉殿、冬の鎮神事は専玉殿に関係した神事そのものと考ええる。

なお、貫前神社には久那斗を投入する神事と同様に、桃の実ぐらいの大きな石を投入する神事があることを付記しておく。本神事は、旧暦九月九日に行われた神事である。押殿にて祝詞奏上した後、鉾を持った神職と石が乗つた台を持つ神職が押殿の階下へ降り、本殿に向かって石を三個投げる。その後、本殿の右、次に左にて本殿に向かって玉垣内に石を三個投げる。この神事がいかなる意味を持つか不明である。久那斗と同様に禍災を除くものか。

以上、御戸開祭の諸神事について考察を加えてみた。如上で論じてきた通り、諸神事を経て斎行される御戸開は春・冬の両度斎行されているが、それは原則として両度のみしか本殿の御屏を開かないということになる。

御戸開祭は、この本殿の御屏を開屏して祭を行うことに意義がある。即ち、如上に既述したように御屏は、外陣と内陣の二つの御屏が開屏される。祭は外陣において行われるが、その際、「行事私記」にある延宝八年の「上野国一宮年中行事祭禮記寫」によれば、かつては七十五膳の神饌が内陣に供されていた。この神饌は、次回の御戸開祭まで撤下されず、そのままの状態で置かれ、そし

本神事は、当社の祭神が経津主大神の他に姫大神が一座祀られていることよりして、当地域に数多く居住したといわれる朝鮮半島からの渡来人によって買前神社が創建された信仰の名残を示す神事であるといわれてきている。しかし、冬の御戸開神事のみには織られるという荒袴は、単に買前神に供える神衣という意義ではないのではなからうか。年毎に新たに荒袴が織られ、それが買前神に供えられることは、渡来人の信仰とは全く関係がなく買前神が年毎に更新されるという重要な意義を有する神事と考える。

4 御衣廻(みそまわり)神事(写真4)

本神事の御衣は、御戸開神事にとって重要な御霊代となるべき幣帛の袴裾の白袴である。神事は、御衣を中心にして時計回りの方向に鉾、大櫓が東、南、西、北の順で四方拝する。四方拝は、古来より変化はないであろう。本神事の意義は、御衣を中心にして鉾、大櫓(御機織神事で織られた荒袴がかけられる)を四方拝することに求められる。御衣の廻りを鉾、大櫓を以て四方拝することにより、御衣が破われ、同時に御衣及び大櫓の荒袴に買前神の神霊が神移されるのであろう。

御衣が、神の御召物であるということは広く知られていることであるが、御機織神事でも触れたように本神事の御衣は、年々歳々買前神を更新している。また、神事は単に御供所で御衣の周囲を廻っているが如く見えるが、仔細に見るとそれは本来の形ではないであろう。御供所に移動する以前は、神城のいづれかの地に神籠が設けられたか、或いは何らかの神殿があつて、そこに御衣が置かれ本神事が行われたものと推する。

5 御先払神事(写真6・7)

神事で使用される大櫓・鉾は、御衣神事終了後行列を整え通常は全く使用されない不門門(御戸開神事の当日のみ開門する)を通過して旧参道を西進し、総門から石段を下り、櫻門を経て拜殿へ昇り本殿に至るルートを御神幸する。大櫓は、神幸後本殿内に納められる。また、御衣も御先払の儀の終了後、神馬に乗せられた後、大櫓と同様なコ

スを御神幸して本殿に至る。

御先払神事の「払」は、「敵」が本来で、先ずこの神事が行われると云うことは買前神の神霊である「御衣」の御神幸コースを鉾・大櫓が蔽い清める神事であろう。

また大櫓・御衣が本殿内に納められることは、御機織神事で織られた荒袴が買前神に神供され、買前神が更新されることも意味する。

神事の御神幸は、平安時代の買前神社に専玉殿、借玉殿の二本殿があつたことを考えると、御神幸そのものは専玉殿から借玉殿、借玉殿から専玉殿へ行われていたことが考えられる。それは、冬の御戸開神事は借玉殿から専玉殿、春の御戸開神事は専玉殿から借玉殿への御神幸であつたと推する。さすれば、かつては境内の何処かで齎行されたとして述べた御衣廻神事も冬は借玉殿前、春は専玉殿前で行われていたのではなからうか。また、このような形で御神幸が行われたとすれば、御神幸そのものは買前神を遷し奉ることであり、一つの遷宮ということになる。

6 オケホケ神事

本神事は、台上の木皿に酌まれた醸酒が神職により著て三度にわたり計九回台上につけられる。本神事は、買前神社の祭礼神事のうち元旦の夕御饗、一月三日の昼御饗、一月五日の末社月読神社祭、一月七日の七草粥式、一月十五日の御筒粥神事、御戸開祭一連神事の中のアブラヤ神事、末社兼山神社祭、末社若獅子神社祭等でも行われる。

しかし、御戸開神事のツケホケは、同じツケホケの儀でも他の神事と異なる意義を持つてあろう。即ち、春の御戸開神事は年の始めに当たつて地域の農作物豊稔を買前神に祈る祈年祭、冬の御戸開神事は農作物の収穫を感謝すると共に、買前神が神供されたものを親しく聞こし食す神嘗祭或いは相嘗祭の意味を持つて神事といえる。

特に冬の場合は単なる相嘗ではなく、荒袴、御衣同様に買前神の更新を意味する重要な祭儀・神事と見られる。この事は、買前神社の式年遷宮が春、冬の御戸開祭に行われる中、冬の御戸開祭に重点が置かれていることから伺

た神事等を反省して、国造自らが古儀をとどめる為に書き記したものであるという。

また、岐阜県南宮神社の寛文八年(一六六八)十一月の奥書を持つ『南宮神事祭礼年中行事』^(註10)には、退転した御田儀、五月会について記事があり、その末尾に

右は往古ヨリ傳ル所ノ年中行事也。當代省略ニシテ異ル事有之。

為後監、令書記之者也

とあり、再興に努めている心意が伺われるとする。

買前神社もこれら神社と同様に、退転していた神事・祭礼行事の再興につとめたものと見られ、それを書き記したのが如上の史料である。幸い買前神社の場合は、これに記録された神事・祭礼行事が、明治八年頃友成通信により『行事私記』として詳細に書き留められた。それ故に買前神社の神事等は、明治維新後も一部の神事を除いては退転することもなく今日まで行われている。その中には、我が国の祭祀を研究する上で貴重な神事もある。

本来なら、『行事私記』にある全ての神事について考察を行う所であるが、紙幅の都合もあり御戸開祭関連神事についてのみ考察を行うことにする。

1 注連釣神事

本神事が行われる富岡市七日市と一宮町の境に位置する宇島坂の大明神本は、かつての買前神社四至の一つと伝えられている。

本神事は、四至各々の場所で行われていたものと考えられる。神社の四至は、鳥坂の他に富岡市宇田字注連木、富岡市神農原字白木、富岡市田島字鳥居の三個所と伝えている。広大な広さであるが、この範囲の中がかつての買前神社の神域であったであろう。『上野国交替実録帳』^(註11)には、抜鋒神社の建物群として「四面鳥居 各有有欄」なる記載がある。この四面鳥居が四至の位置ならば、注連釣神事は、各々の鳥居に注連縄を張る神事となる。しかも、この神事で大鼓詞が奏上されることは、御戸開神事に先だつて神城内を清浄にする爲の神事であったと推される。本神事は、買前神社の神域を考える上で貴重な神事である。

2 鹿占(鹿ト)神事(写真2)

本神事は、鹿の肩胛骨に焼酎をさして吉凶を占う神事である。我が国の鹿ト

は、弥生時代以来行われていた古い占いであった。例えば鳥取県青谷町の弥生時代前期から古墳時代初期にかけての青谷上寺地遺跡では、全国最多のト骨二二七点が発見、調査されている。関東地方でも神奈川県三浦市南下浦町の鬼沙門B洞窟遺跡、間口洞窟遺跡、千葉県市原市の期間遺跡等で発見されている。また、群馬県内でも四世紀のト骨遺物が、高崎市の新保田中遺跡で発見されている。観察した限りでは、各遺跡出土ト骨(鹿肩胛骨)の占は、買前神社と同じ方法(焼いた籠等に骨に穴を開け、その開きぐわいで吉凶を占う)である。

買前神社の鹿占は、明治維新後、神社を中心とした三十一箇村の火難を占っている。この火難占に対し、本神事は、新しい年の吉凶を占う年占神事であるとの説もある。果たして、その通りなのであろうか。

本神事がかつて春(明治三年一八七〇年)まで行っていた、冬の両御戸開神事が盛行される前に行われていた事実を踏まえれば、本来は火難・年占をトしたのではない。推測の域は出ないが、伊勢神宮の御占神事の如く神事に奉仕する神官等、即ち御戸開神事に奉仕する神官・神人たちの不浄・吉凶をトした神事ではなからうか。

なお、本神事の詳細は、『鹿占習俗—群馬県』^(註12)に報告されているので、それを参照されたい。また、本神事では「上野国神名帳」(五百四十九座)が奉唱される。ちなみに奉唱される「神名帳」は、巷間で一ノ宮本或いは買前神社所蔵本と称されているものである。

3 御機織神事(写真3)

本神事は、冬の御戸開祭のみ行われる。本神事では、荒袴が少女によって織られるが、織られた荒袴は大神に懸けられ御戸開神事当日の御衣廻、御先弘神事で重要な役割を果たす。大神は、御戸開神事が本殿で行われている間、本殿の御扉に立てかけて置かれ、神事が終了すると外陣に納めらる。そして春の御戸開神事まで、そのままの状態で見られる。

以上が御戸開祭の概要である。

上記神事の考察については、私が「一之宮貫前神社調査報告書」(注6)の中で一部行っている以外は、神事の紹介のみが多く考察がなされていない。そこで改めて、これら神事の考察を行う事にする。

四、御戸開祭諸神事の考察

御戸開祭諸神事の詳細は、明治七年(一八七四)十二月二十四日より同十年(一八七七)十二月八日までの三カ年にわたって貫前神社の主典として奉仕した長野県出身の士族友成道信によつて記録された「貫前神社年中御祭典行事私記」(注7)以下「行事私記」と称す)に見えらる。

友成道信は、貫前神社の主典として奉仕するかわら明治維新後政府の手によつて次々と神社の諸儀式が改革・整備されていく中、改革のどさくさに紛れて従来伝承されてきたところの数多くの祭礼行事が内容を変更されたり、廃止の憂き目にあつた状況をつぶさに見て、少なくとも貫前神社において明治七年まで執り行われていた祭礼行事を実に緻密に「行事私記」に書き記し、後人に残してくれた。

その結果、貫前神社においては官制祭典の他に、古くより神社で斎行されてきた多くの神事・祭礼行事が、明治初年に廃止の憂き目にあつたことなく今日に伝えられることとなつた。同書には、後人の朱筆にて

明治八年、当社社家の行ひ来りし伝来祭式を見聞して草稿したるものなり
と云い伝ふ

とあるが、貫前神社伝来の神事等を考える上で極めて貴重な史料である。

「行事私記」の冒頭には、延宝八年(一六八〇)に行われていた貫前神社の神事が

上野國年中行事祭禮記寫

一、正月朔日供餅申刻供買餅神楽之行法至夜獻燈子費御酒

三日水之行法申刻御膳

七日朝供御酒神楽之行法軍射之祭
十五日簡粥之行法

一、正月終之亥日入神事子日迄二七日止鳴鑼之音禁惡莫從丑日
至未日七日之中毎日祭末社其間御卜焼之行法歟山祭

一、二月初中日戌刻御戸開祭御供七十五盞供内殿戌日丑刻鎮之行法
一、三月三日朝供草餅御酒神楽
十四日舞童

一、五月五日朝供粽獻御酒神楽申刻流鏝馬
一、六月晦日名越歌

一、七月七日御田植祭

一、九月九日朝供御酒神楽申刻流鏝馬
一、十一月終之亥日入神事如正月之祭法

一、十二月初之申日御戸開如二月之祭法外御機織之祭神明祭之神楽有
之

一、毎月朔日十五日二八日供御膳
と記されている。

右の史料に見える神事・祭礼は、延宝八年当時における貫前神社の主要神事・祭礼行事を書き記したものである。桜井勝之進氏によれば、この頃は前代の戦国動乱からようやく世の中が落ち着いてきた時期で、戦国動乱の中で退転していた各神社の神事・祭礼行事の復古努力、書留がなされた時期でもあつたという。例えば、和歌山県の日懸・國懸神宮の「寛文五年(一六六五)卯月廿一日、紀伊國造第六十九代刑部少輔從五位下紀朝臣昌長」の奥書がある「日懸・國懸兩太神宮年中行事」の末尾には

右當宮昔日祭祀の次第大概如此、仍如件
と有り、更に同じ年の五月三日付けの奥書をもつ「當時祭祀次第」の末尾には

右古代年中祭祀百二十余日之内、格別之祭祀之分、書出申候
とし、「古代當宮年中行事大略之事」の末尾に

右等之式天正以來多斷絶仕候

とも記している。これは紀伊國造第六十九代紀朝臣昌長が、天正年間以來断絶し

門を通つて拝殿に昇る。この際献串、水、切麻台を拝殿傍に置く。

⑧宮司以下、拝殿に着座。(この後、冬の御戸開祭は、宮司以下の神職が木綿手袖を首にかける。次に、宮司は本座を立ち、本殿に昇殿して外陣、内陣の御屏を開く。御屏は正面は宮司が開け、外陣の左右は他の神職が開ける。開屏が終了すると、春の御戸開神事は前年の冬の御戸開神事の神職が、春の御戸開神事には春の御戸開神事の神職が撤せられ、中内陣、外内陣が酒掃される(現行は、各々の神事の神職が神事終了後、直ちに撤せられる。したがつて開屏後は、直ちに神職が供せられる。酒掃が終わると、三十八台の神職(御飯三十一台、魚二台、菓子三台、斗餅一台、七ツ皿二台)と神造酒神事で作られた醸酒二瓶、御先私神事に用いた埴子が供えられる(現行は、御飯、サルデークナジリ、栗餅、菓が二台、魚二台、菓子二台、斗餅一台、醸酒一台、七ツ皿二台の経十台)。

⑨神職が供せられると、次に七ツ皿の儀が行われる。これは外内陣の東方に、西に向かつて坐している宮司に対し、神職が神職として供された七ツ皿の台を宮司の前に置き、更には他の神職が長柄提籠子を持って昇殿し、宮司の傍に座して行う。先ずは前者の神職が、神前に供された醸酒を撤して、瓶子の醸酒を長柄籠子に注ぐ。次に、宮司は拍手して台上の木皿(木皿の上には予め四角の白紙が敷いてある)を取りあげる。次に、他の神職が木皿の上に醸酒を酌む。七ツ共に酌み終わると、前者の神職が七ツ皿二台を再び神前に供えて、この儀式は終わる。

⑩次に、ヲケホケの儀が行われる。この儀式は、

みきものあじあい

ありてよきこと

きこしめせとまをす

という歌が奏楽される中で、宮司の前に木皿と箸をのせた台が置かれて、籠子を持った神職が宮司の傍に座して執り行われる。先ずは宮司が拍手して台上の木皿を両手で探ると、籠子を持った神職が木

皿に醸酒を酌む。酌み終わると、宮司は左手に木皿を持ち、右手にて台上の箸をとり、木皿の醸酒を箸につけ、台の上三箇所に醸酒をつける。終わると箸を台上に戻し、再び木皿を持ち手に持つ。右の儀式を三献行い、終わると箸と木皿は台上に置かれ、神職により台はもとの所に納め置かれて、オケホケの儀は終わる。

⑪次に、外内陣にて宮司が祝詞を奏上する。

⑫祝詞奏上が終わると神職一同が拝礼し、御衣、荒袴を懸けた大神、木綿手袖は外陣に納められる。また神職も瓶子、埴子は撤せられるが、三十八台の神職はそのままの状態で、次の御戸開神事まで供え置かれた。そして、これが神事が終了すると、宮司は御屏を閉じ、本坐に戻る(現行では明治以来、祝詞奏上後に御神子(舞姫)により大和舞が拝殿にて舞われる。舞終了後、玉串奉奠の儀が行われ、御衣、荒袴を懸けた大神等は外陣に納められるが、神職は全部撤換される)。

⑬宮司が本座に帰ると、次に外陣の御屏前中央には御先私の儀に用いられた鉢が左右の御屏前には大神が立て置かれる。

⑭次に、神職一同退座する。

18 鎮神事

御戸開神事終了後四日目の未明に行われる。神職は早朝に潔斎を行い、その後神事に用いる飯を炊き、角板に四つ盛置く。また榎枝を七、八寸の丈に切つたものを十八本作り、これを三本づつ紙にて結んで置く。また草鞋六足を用意して置く。春の鎮神事は、現行三月十七日(旧暦戊日)の午前二時より県立社会教育館東にある「東の鎮塚」(徑十米、高さ二米ほどの大きさ、古式の円墳か、冬の鎮神事は十二月十五日(旧暦戊日)午前二時より神社北麓の民家の傍にある「北の鎮塚」(丸塚の跡、榎木がある)で行われる。神事の一切は口伝秘事とされており、儀式の詳細は不明である。神具としては、榎木の枝で作る二十cmほどの長さの「クナド」(枝或いは箸か?)と称されるものを用いる。

御戸開神事

より布(荒袴)をはずす。

⑥はずされた布は、左の大櫛にかける。この大櫛は、御戸開神事の座の「御先私神事」に用いられる。

⑦次に、神職が奏楽の行われる中で、竹鈴を持って神座をはじめ、東西南北と四方を拝する。

⑧次に、再び神職が神杖を持って、四方拜を行う。

⑨次に、櫛の打違たるを持った神職が、四方拜を行う。

⑩次に、櫛の葉八ツをつけた木綿手強をかけた神職が、弓、矢を持って四方拜を行う。この弓矢は、桑で弓を作り、矢は蓬で作る。またこの弓矢は、神事終了後保存され、正月に行われる「水的神事」に再び使用される。

⑪神職の四方拜が終了すると、次に少女が神職同様に竹鈴、櫛、神杖の打違つたもの、弓矢を持って四方拜を行う。

以上で、神機織神事は終了する。

春、冬の両御戸開祭とも午後七時より、次の順序で行われる。

①旧宮崎村(現富岡市宮崎)より消防団が到着し、下り参道の石段の両脇にて篝火を焚く。

②宮司以下の神職は、斎館を出て櫻門石側の祓所で修祓の儀を行う。終了後御供所に入る。神職は、西に向かつて着座。

③御供所では、予め舗設してある御衣(白布に包んだ白袴で、絹一匹)の位置にて御衣廻四方拜の儀を行う。この儀は、神職が御供所の西方に舗設してある鉾と大櫛(冬の神事の場合は、神機織神事で織った荒袴を懸けた櫛を用いる)をとり、鉾をもつた神職が中央に立ち、大神を持った神職二名が左右に並んで立ち(荒袴を懸けた大櫛は、北側南面する)、御衣に向かつて一拝し、次に左へ廻り南、西、北とそれぞれ一拜する。(写真4)。

④御衣廻四方拜の儀が終了すると、神職一名が御供所の御食棚の雄子

をとる(現行では雄子を求めることが不可能なので、雄子を懸ける祭具をとる)。

⑤次に、御先私の儀が行われる。この儀は、古くは神職一名が鉾、一名が雄子を持ち、更に二名が大神を持って御供所東口より出て、雄子を中央にして、この雄子を左右より大神にて覆い、後より鉾にてその上を覆う。そして雄子の左右に高張提灯をつけて、行列を整える。行列は、勸額島居より不明門(写真5)を出て西に進み、惣門より入って石段を下り、櫻門を入り拝殿に昇って鉾、大神を便宜の所に置く。雄子は御食棚に置く。その後再び御供所に戻り、神職は御供所の神籠を拝殿に運び、これを神籠棚に置く。終了して神職は御供所に戻り、今度は御衣を神馬に乗せる。また予め用意してある歌串と川瀬神事の日の高田川より汲んできた水、切麻を神職が各々持ち、惣門前で神馬を持つ。御衣を乗せた神馬は、行列を組みお先私の儀と同じコースをとり、惣門前に行く。

(現行では、お先私の儀と御衣の行列の儀は一緒に行われている。)
行列は、宮崎警護消防団—高張—大敵櫛—伶人—御神子(舞姫)—高張—雄子—大櫛—鉾—高張—宮司—神職—神馬—高張—参列者—
ノ宮警護消防団の順序である。なお現在は、馬が調達出来ないため、御衣は氏子総代が持つ)

⑥次に、惣門前で手水の儀を行う。これは、惣門前に予め注連縄を張り巡らした祓所を舗設し、ここに川瀬神事で汲んできた水と切麻等が置かれる。御衣の行列が着くと、宮司以下の神職が祓所に入る。当面する宮司の前には、切麻台が置かれる。次いで、水を持った神職が、宮司に水を提ぐ。この水にて宮司は、盥嗽する。この間歌串を持った他の神職が、宮司を修祓する。宮司は、盥嗽し終わると白紙をとり口と手を拭い、更に前に置かれた切麻台から切麻をとって歌う。宮司の祓が終了すると神職は御衣の前と後で各々水をこぼし、歌串で修祓する。

⑦手水の儀が終了すると再び行列を整え、惣門を入り石段を下り、樓

五本に、巻、式と筆記し、これを炉の中央及び四方に立てる。次に、

炉に炭が入られる。次に火打ち石と火打ち金にて火がおこされ、炭にその火が入られる。この間、神職によって「上野国神名帳」が奉唱される。炭の火がおきると、炉に舞が入られ焼かれる。次に、祝詞が奏上された後、神職により鹿トが行われる。その方法は、予め炉の傍に置いてある鹿骨(肩胛骨をうすくしたものを)を取り上げ、これに添え木をあて左手に持ち、右手には焼籠を持って、鹿骨を先ず三回貫く。終わると、この鹿骨を白紙に包む。次に、他の神職により村名帳が取りあげられ、古式に則り小幡南とか黒川北と北甘菜郡下三十一カ村の村名が呼ばれると、その声に応じて再び左手の白紙に包まれた鹿骨、右手に焼籠を持って何々村と唱え、焼籠を鹿骨に貫き鹿トを行い、吉凶を判じ大吉、中吉、小吉と唱える。判ぜられた吉凶は、他の神職が「鹿占神事御占方」に記録する。鹿トが終了すると鈴と笹の葉を持った神職が舞を行う。舞が終了すると神事は終わる。

- 10 末社高麗神社・櫛八玉神社・八幡神社・日枝神社・水分神社祭(旧暦は、鹿ト神事当日午後六時)、祭は、熱田神社に同じ。

- 11 鍛山神社祭(旧暦は、春二月初申日より四日酉日)

冬は行われぬ。拝殿の前に寛廊を敷き、神職一名が、櫛の枝に木で作った鉄を懸けたのを持ち、本殿の方に向かって立つ。次に、宮司が神職の後に本殿に向かって座す。次に、オケホケを行う。次に、神職が太鼓を打ち先立ち、以下一同引き続き櫛を持って立つ神職の廻りを三回廻り、終つて本座に復す。次に、鼓を打ち

東よりいす(つ?)る小松もわけて東よりいす(つ?)る
月をにしへもやらず本(故?)こてらす大神まさんざいらく

の歌を唱う。終わると退座。

- 12 魂清の神事(旧暦は、鍛山神社祭当日に行ふ)

籠に至り、鍛山神事を用いた櫛に懸けた木鉄を籠に立て、湯桶と鈴を振り奏を奏する

- 13 末社須賀神社祭(旧暦は、鍛山神社祭当日午後六時に行ふ)

祭は、熱田神社祭に同じ。

- 14 末社稲荷神社・若御子神社祭(旧暦は、春二月初申日より三日前午日、冬十二月初申日より三日まえ午日)

稲荷神社祭は正午十二時神職が御供所に行き行う。御供所の西南の方に神座の机の机を置く。次に、神職が神座に向かって座す。次に散米。散米の間奏楽。次に神職が、木皿に洗米を盛り台にのせ、他の神職の前に置く。次に神職が、拍手して木皿の洗米を振り、台の上に左、右、左と散し一拝する。次に、神職が台を撤し、本座に復す。次に、机を撤す。若御子神社祭は、御供所丑の方に机を置く。この時神饌十台を御食棚に備え置く。次に、神職神座に向かって座す。次に散米。次にオケホケを行う。オケホケの間は奏楽。次に、神職が炉の方に至り火を鑽出し、葦にてつくつた梯子を焼く。次に、神職三名が机の廻りを三度廻る。次に直会。終わつて本座に復すして退座する。この日、午後六時より宮司以下の神職と御戸開神事に関するもの一同、深齋を行う。

- 16 御機織神事(旧暦は、十二月初申日より二日前未日午後六時 写真3)

春の御戸開神事はない。冬の御戸開神事のみ神事であり、現行は御戸開神事前日の十二月十一日に行われる。この神事は、御戸開神事において貫前神に供へる神衣を織るもので、毎年氏子の中から十三歳未満の少女が選ばれて荒袴を織る。この神事は、かつて御供所で行われていたが、現在は拝殿で行っている。神事は機織具(いざり機)を拝殿中央に補設し、その北に神座の机を設け、更にその北に一、八メートルぐらゐの長さの大櫛二本を立て、次の如く行ふ。

①大櫛は、右櫛に四垂を十二、左櫛に八つつける。

②神職は、機織りの西方に座す。

③十三歳未満の少女は、機織りに向かって座り、その左右に神官が座す。

④少女は、機織の経糸を八筋作り、それを結巻に巻き、機織にかける。

そしてアゼ等の諸機器を取り付ける。

⑤次に、緯糸を管に巻き、機を織る。八梭の荒袴を織り、終わると機

に神職一同、禮を直会する。①の神職の前に、盃を置く。同神職盃を採る。他の神職盃を酌む時に鯛と串柿を床木に盛り、①の神職の前に置く。他の神職以下同じ。終了後、本座に復して神事は終了。

5 末社熱田神社祭（旧暦は、春二月初申日より八日前丑日、冬十二月初申日より八日前丑日）

御供所の西方に神座を設ける。次に、御供所の中央に神座に向かって神職一名（①）座す。次に神座と神職の間に置の穂で作ったアツリヤを据う。（アツリヤは予め置の穂で作っておく。次に神職一名（②）神籠を奉る。次に①の神職散米。次に②の神職木皿に洗米を盛ったのを台のせ、①の神職の前に置く。①の神職は、拍手して木皿の洗米を撮み、台の上左右と散し一拝する。②の神職台を撤す。つぎにオケホケ。次に、神職三名アツリヤにのせてある置の穂をとって一本ずつ持ち、神座に向かって一拝三名ともし、アツリヤの巡を一匝し、また神座に向かって一拝一匝し、また神座に向かって一拝一匝する。合わせて三拝三匝し、終わって置の穂をアツリヤに納め本座に戻る。次に、神職アツリヤと神籠を撤す。終了後、直会して祭は終了する。本日、本社に注連縄を張り直す。

6 末社諏訪神社・八坂神社祭（旧暦は、春二月初申日より七日前寅日、冬十二月初申日より七日前寅日午後六時）

祭は、熱田神社に同じ。

7 末社少彦名神社・長田神社・近戸神社祭（旧暦は、春二月初申日より六日前卯日、冬十二月初申日より六日前卯日午後六時）、祭は、熱田神社に同じ。

8 川瀬神事（旧暦は、春二月初申日より五日前辰日、冬十二月初申日より五日前辰日午前六時）

春は三月十日、冬は十二月八日の早朝に神宮一同、神社の裏手の東方を流れる高田川の川辺において齋行する。先ずは神宮一同神社の裏山道を通り、高田川に行く。しかる後に、同川にて盟誓す。次に御戸開神事の当日、総門の前で行う手水の儀に用いる水を汲む。また、

鹿占神事に用いる祭具を洗い清める。高田川での神事が終わると神宮一同は、一宮町犬飼にある榎木に注連縄を張り、しかる後大獻詞を奏し、終って本社に戻る。

9 鹿ト（白）神事（旧暦は、春二月初申日より五日前辰日、冬十二月初申日より五日前辰日午後二時 写真2）

甘菜郡下三十一箇村の火難を判ずる神事である。かつては春、冬の両御戸開祭で行われていたが、現在は冬のみで十二月八日に執り行われる。従前は御供所に

①向所西方の方に注連縄をはる。
②次に宮司が注連縄の所に行き、東に向かって座す。
③宮司の前に机を置き、その上に「上野国神名帳」を置く。また神職の前に机を置き、硯置を置く。

④次に、神職が炉のところへ行き鹿トの用意を行う。

⑤次に、神職が当国の神名帳を読む。他の神職が火を鑽出し籠を焼く。

⑥次に、神職が祝詞を奏す。

⑦次に、鹿トを行う。

⑧次に、鹿トが終了すると神職が鈴と笹を持って舞を奏する。

の順序を経て行われていたが、現在は拝殿で齋行している。拝殿の神事は、祭具を備設して行う。拝殿の主な祭具の備設状況は

①神籠は、「上野国神名帳」が守袋に入れられて掛けられ、渡殿に立てかけられる。

②八角形の炉に注連縄が張り巡らされ、拝殿正中の北側に置く。

③火打ち石、火打ち金、鎌、鹿骨、浜木等の祭具は、漆塗の折敷に並べて炉の側に置く。

④諸神勸請祝詞（上野国神名帳）の座は、拝殿正中南側に設けられ、「上野国神名帳」は、案上に置かれる。

である。

神事は、先ず川瀬神事で祭具が洗い清められる事より始まる。次いで神職が炉の中に立てる長さ二十七廻ほどの忌申籠に白紙を挟んだ物

(1) 真御住御剣奉遷祭 三月十三日午後二時

(2) 本殿遷座祭飯殿祭 春の御戸開祭 三月十三日午後八時

(3) 御宝移しの儀 三月十三日午後十一時開始

(4) 延道鋪設 三月十四日午前一時五十分

(5) 遷御 三月十四日午前二時

(6) 本殿遷座本殿祭 三月十四日午前四時

現行の遷宮は、上記の諸祭儀の下に斎行されている。この形は、明治維新後数回の遷宮をへた。しかし遷宮が、御戸開祭当日に斎行されていることは変化していない。また遷御(御神体の渡御)の時刻も、古来のままの午前二時(寅刻)を固く護っている。

三、御戸開祭

御戸開祭は、貫前神社の祭典の中で最も神秘的且つ重要な神事である。この神事は、春と冬の二季に斎行される。現行の祭日は、春が三月十三日(旧暦では二月申日)、冬が十二月十二日(旧暦では十二月申日)である。

御戸開祭は、次の神事、行事を経る。

1 注連張神事(旧暦は、春二月初申日より二十二日前亥日、冬十二月初申日より二十二日前亥日)

日縄釣行事ともいう。春は二月二十二日、冬は十一月二十二日の午後八時より行ふ。神事は神社の鎮座する一宮町と富岡市七日市の境界に近い一宮町宇島坂にある大明神の四本並列の棕の木に注連縄を張り、しかる後に大祝詞を奏する。

大祝詞奏上が終わると、棕の木を一周して神事は終了する。神事が行われる大明神木は、神社の東の方向(正しくは東南)に相当し、四至の一角に当たる。この神事は、四至の他の三方所、即ち富岡市神農原字占木(西)、富岡市田島字鳥居(南)、富岡市宇田字注連木(北)においても行われていたという。注連張神事が行われることによつて、

貫前神社の最も重要且つ神秘的な神事の御戸開神事は始まる。旧暦十二月申日より十六日前辰日午前二時(冬の御戸開祭のみ行われる)。

内宮の御前に薦を敷く。次に、宮司以下神職着座。但し十三歳未満の少女一人を雇い、座につかせる。次に内宮、外宮の東方に篝火を焚く。次に、神職二名木太刀を篝火の上にわたして、刃及び重ねを廻しつづ焼く。次に、神職一名篝火で焼く神職の木太刀の上を一度廻す。終わって神職は木太刀を神前に奉る。次に神職を奉る。次にオケホケを行う。オケホケの間は、奏楽する。次に、宮司が祝詞を奏上する。次に、神職拜礼。次に、宮司は竹鈴を持って奏楽の行われる中、神前を始め、東、南、西、北と四方拝を行う。終わって再び宮司は、櫛の枝を持って四方拝を行う。次に、宮司は櫛の打進いたるを持って四方拝を行う。次に、宮司は弓矢を持って四方拝を行う。次に、少女が奏楽の行われる中、宮司が行った如く四方拝を四度行う。次に、神職一名が同様に四方拝を四度行う。これが終わると神機を撤す。次に、直会を行い、赤飯を給う。次に、退座する。なお、竹鉾、櫛、打進櫛、弓矢は、御機織神事の四方拝に用いる。

3 神酒造神事(旧暦は、春二月初申日より十二日前酉日、冬十二月初申日より十二日前酉日)

御戸開神事に使用する酒を造る。御供所にて飯を炊き、甘酒を醸る。神酒つぎ神事(旧暦は、春二月初申日より八日前丑日、冬十二月初申日より八日前丑日)

神職一同御供所に着座。次に神職一名御供所の中央西に向かつて座る。①次に神職一名が神酒の入った甕(瓶子二)を持ち出し、その前に置く。次に神職二名②が甕の入った長柄銚子、提銚子を持ち①の傍に着座する。甕は、神酒造神事で造つたものを用いる。次に①の神職が、拍子して甕を採り上げ②の長柄銚子を持った神職が甕に甕を注ぐ。甕がつかれば、提銚子にて甕を加え、甕(瓶子二)の量は同じとする。次に、神職甕の口を覆う。次に、神職甕を御籠に納める。次

・次に御終わるを待つて所役拝殿御座を閉す。樓門閉扉は警備隊これを行う。

・次に遷御

警蹕とともにあらかじめ召立の列次により出発、仮殿に向かう。列次は石段を登り途中より右折、鳥居内側を右折して進御。遷御の際の列は、次の通りである。

先導神職―大麻―塩湯―贊者―猿田彦舞人―巫女―侍人―御楯―御鉾―憲御胡録―首御騎―典儀―警蹕―前行所役―隨員―前行所役―隨員―前行神職―行障―網垣―御羽車―首御騎―紫御羅―御太刀―御弓―壹御胡録―御鉾―御楯

遷御の儀は、出御の時宮司以下草鞋を履き、袴の股立を高くとつて白鉢巻きをしめ、覆面・手袋を着用し、木綿袴で御羽車の長柄を固く結んで肩にかける。そして静かに拝殿まで出御し、木折(拍子木)が強く響く中を、境内の燈火、篝火一切を消して、闇黒のうちに鶯鳴の所役が羽音高く響かせて三声を挙げると同時に、拝殿の御扉が開かれて、御神体の御羽車は網垣とともに、荒麗の袖設された上をいつきに仮殿まで駆け抜けていく。途中、御羽車の被い布・網垣め荒麗などは、これらを用いて舞臺を行うと「景があたる」ということで、参拝者の奉い合いとなる。

・次に入御

この儀、列次が仮殿の拝殿前に至り先導神職、前行所役、奉賛会長ら一列の者は右側、二列縦隊の者は左右に分候し、御羽車を奉送する。網垣は左右に展じ拝殿入り口を閉じる。行障右側に候す。その他の奉仕員は、左右に分候して点燈まで奉待す。

・次に御羽車は拝殿にて宮司以下所役手水の後奉昇して入御。点燈・仮殿に御羽車が引き入れられると、木折(拍子

6

仮殿遷座仮殿祭

十二月十三日の午前四時から、仮殿遷座の仮殿祭が、次の通り斎行される。

木)が強く打ちならされて、境内の燈火が点せられる。
・次に宮司御靈代を神座に奉安し、御座を閉じ本座に復す。
・次に宮司拝礼、諸員一同列拜。
・次に宮司以下諸員退下。

・時刻 宮司以下諸員齋館前庭に列立一掛。これより先手水の儀あり
・次に修祓

・次に宮司以下参進、所定の座に着く。
・次に宮司御座を開き側に候す。この間奏楽。

・次に彌宜以下齋員神饌を供す。この間奏楽。
・宮司祝詞を奏す。

・次に御神樂を奏す。猿田彦舞。
・次に宮司玉串を奉りて拝礼。齋員自らの座で列拜。

・次に前行所役玉串を奉りて拝礼。
・次に氏子総代玉串を奉りて拝礼。

・次に奉賛会長玉串を奉りて拝礼。
・次に参列者代表玉串を奉りて拝礼。一同列拜。

・次に彌宜以下齋員神饌を撤棄。
・次に宮司御座を閉じ本座に復す。この間奏楽。

・次に宮司一拜、諸員これにならう。
・次に宮司以下諸員退下。

(八)

遷宮祭(本殿遷座祭)

本殿遷座祭は、仮殿遷座祭同様の祭儀で、酉年の三月に、次の通り祭典が斎行される。

典儀—前行諸役・提灯持—隨員—神社総代—奉賛会役員
—参列供奉員—神社高張—神成警備隊—一ノ宮・坂井警
備隊—秋畑・上坂警備隊

・次に修祓

神衣及び宮司・祢宜、祓所に着き手水をなし、次に神馬の前後に水を注ぐ。次に宮司・祢宜、切麻をもって自祓をなす。大麻役宮司・祢宜、神馬を牽ぐ。

・次に宮司以下参進、昇殿して所定の座に着く。

・次に宮司一拜、諸員これにならう。

・次に宮司御座を開き御に候す。祢宜副從す。

・次に祢宜以下神饌を供す。

・次に七ツ皿の饗。

・次にオケホケの儀

・次に宮司祝詞を奏す。

・次に俵舞を奏す(あずらしな 浦安の舞)

・次に横田彦の舞を奏す。

・次に宮司玉串を奉りて拜礼。

・次に前行諸役玉串を奉りて拜礼。

・次に氏子総代玉串を奉りて拜礼。

・次に奉賛会長玉串を奉りて拜礼。

・次に宮司御座を閉じ本座に入る

・次に宮司一拜、諸員これにならう。

・次に宮司以下退下。

3 御神宝移の儀

この祭典は、十二月十二日の午後十一時に斎行、十二時に終了する。天保十己亥年(一八三九)二月吉日に記された「宝物由来記」にもとずいて白衣・白袴の斎員が、御神宝を目八分に捧持し、警護団の士に足下を照られながら、「是なる古太刀一振は、源家の太祖六孫王

4 竈道鋪設

經基公より御奉納」と朗々と由来を披露しつつ、本殿から仮殿に神宝を移す儀である。

十二月十三日ごろ、遷御の際御神体がお通りになる通路に、荒蕪が鋪設され遷御の用意がなされる。

5 遷御(写真8)

十二月十三日の午前二時から遷御が斎行される。諸祭儀は、次の通りである。

・時刻に宮司、前行所役以下祭員齋館前に列立、これより先に手水の儀あり。

・次に宮司以下前行所役祓所に列立。

・次に修祓。

・次に宮司以下参進し、諸員おのおのその位置に列立。

その儀、祢宜以下本殿に参入、御羽車を外陣に据え、布車

所役(御神体を白い布で巻く役)は外陣に、警護所役は渡

殿に着く。御羽車所役外陣に参入、御羽車の両側に着く。

宮司以下殿内奉仕員覆面・手袋をなす。この間拝殿の御座を閉じる。この間召立所役、召立文により行列を整える。

竈道鋪設の完備を候す。

・次に宮司・祢宜階上へ参入し、御御座を奉仕する。

・次に宮司御座代を御羽車に納め本殿出御、警護、一同平伏、

又は警折。

・次に宮司以下供奉御羽車所役奉昇拜殿にいたる。所役本殿

の扉を閉す。この間前行所役・奉賛会長階下に着き出御を

待つ。神職一名御仮殿に先行、御本殿を開扉す

・次に消灯(笏拍子台図) 一切の用意成るを待つて、警護

とともに拝殿開扉

階建てとなつてゐる。

(五) 上棟祭

常例の通りに行う。

(六) 新殿祭

仮殿の階下に神鏡の奉を補設し、階上・階下・祭具・神鏡などを修葺の後、次の通り祭典が行われる。

- ・御祝の玉を内陣の四隅にかける。
- ・四種の祓を内陣で修する。
- ・神鏡を供える。
- ・鳴弦の式を行う。
- ・斎主祝詞を奏す。
- ・神鏡を敬する。

(七) 遷宮祭(仮殿遷座祭)

現行の遷宮祭は、十三年毎の申歲に御仮殿遷座祭を、翌年の酉歲に御本殿遷座祭を行う。各々の遷座祭の諸祭儀は、次の通り齋行してゐる。

1、真御柱御剣奉遷祭(写真5)

本殿の真御柱に剣先を上にして縛り付けてある御剣(御神体に準じて扱われている)を、本殿から仮殿の真御柱に奉遷する祭である。祭典は十二月十二日の午後二時から行う。

- ・当日早旦、社殿を裝飾す。
- 時刻 宮司以下祭員奉仕員一同祓所に着く、これより先、手水の儀あり。
- ・次に修葺。
- ・次に宮司以下所定の座に着く。

・次に宮司一拜、諸員これにならう。

・次に宮司御屏を開き側に候す。

・次に称宜以下祭員神鏡を供す。この間奏楽。

・次に宮司祝詞を奏す。一同平伏。

・次に奉賛會長玉串を奉りて拝礼。

・次に氏子総代玉串を奉りて拝礼。

・次に称宜以下祭員神鏡を敬す。この間奏楽。

・次に宮司御屏を開き殿内に参入。この間奏楽。

・次に奉遷。列次は下記の通り。

- 先導神職―大麻―塩湯―贊者―猿田彦舞人―伶人―巫女
- ―御桶―御鉾―壹御胡録―御弓―御太刀―紫御羅網―首
- 御鬘―典儀―警蹕―前行所役(氏子代表)―隨員―前行
- 神職―行障―絹垣―御剣―副從神職―管御簀―紫御羅網
- ―御太刀―御弓―壹御胡録―御鉾―御桶―

2、仮殿遷座祭本殿祭(御戸開祭)

冬の御戸開祭で、十二月十二日の午後八時から次のとおりに行う。なお御戸開祭の詳細は、別項で考察する。

・午後八時 宮司以下祭員齋館前に列立、これより先手水の儀あり。

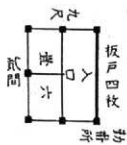
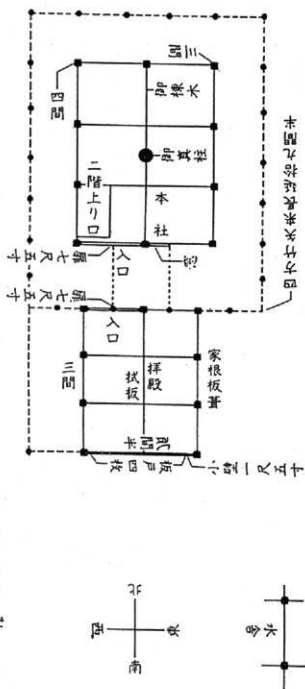
・次に前行所役、祭員参進、祓所に列立。

・次に修葺。

・次に御衣廻りの儀(写真4)

・次に宮司以下行列所定の位置に着く。列を整え勸願・神門を上がり総門に至る。なお、列次は次のとおりである。

- 宮崎警備隊鉄杖―同上高張―同上警備隊―神社高張―大
- 麻―神馬―伶人―先導―贊者―猿田彦―巫女―神社高張
- ―大櫛―雉子―大櫛―御鉾―宮司―提灯持―称宜―祭員・



第1圖 御仮殿平面圖

上野国一之宮貫前神社式年遷宮考(三)

——遷宮祭と御戸開祭について——

神保 侑史

一、はじめに

私は貫前神社の式年遷宮について、既に「式年について」、「造替の建物について」の二題について考察を進めてきた。その中で同神社の式年、建物の造替が頑なに古態性を護つてきた事を指摘しておいた。

今回取り上げる「遷宮祭と御戸開祭」は、貫前神社式年遷宮の遷宮祭と同神社の一大祭典であり、しかも我が国の神社祭祀を考える上で貴重な神事が行われている。「御戸開祭」に敷衍することを原則にしてきた。

本稿では、この御戸開祭を中心にして、如何にして貫前神社式年遷宮祭の諸祭儀が敷衍されるのか、またその意義を考察したい。

二、現行の遷宮祭

現行の十三年に一回敷衍される貫前神社の式年遷宮は、本殿の造替を伴わない、即ち本殿の修理・清掃等に伴う遷宮である。仮殿遷宮が冬の御戸開祭、本殿遷宮が春の御戸開祭に敷衍される。申年の今年平成十六年は、冬の御戸開祭に仮殿遷宮が敷衍される。ここでは、前々回の仮殿遷宮祭に至る迄の、即ち仮殿建設等に関係する諸祭儀について、昭和五十五年の遷宮が如何にして敷衍されたかを紹介する。

(一) 木元祭

仮殿の真御柱に使用する用材の根本で行う。

(二)

地鎮祭・新始祭

仮殿建立位置は、境内西門より入った平坦地に鎮座している摂末社の伊勢内宮・外宮、日枝神社、二十二末社の前庭である。建立位置は古法にのっとり仮殿拝殿前面の見通しを、二十二末社中の諏訪神社の向拝南柱とし、仮殿正中線は日枝神社の中心と西門の中央を結ぶ線としている。仮殿の真御柱は、日枝神社前石垣から七、八メートル(二十六尺)南の地点に建てる。地鎮祭は、常例の通りに右の場所で行われる。

新始祭は、棟梁が丈量の儀、新の儀を形どり奉仕し、用具を水文字形に並べて神酒を供える。

(三)

立柱祭

日枝神社前庭の所定の位置に、真御柱を建てるための穴を深さ二メートルほど掘る。その後、まず鎮物を埋納し、丸石を礎石として底に入れ、その上に真御柱を建てる。

(四)

仮殿の構造

第一図の通りである。現行の仮殿は、寛政十二年庚申中秋吉日の「御仮殿諸用之拒」に準拠して建てられている。本殿の規模は、間口十八尺、奥行二十四尺三寸、廻り一間通り竹矢来である。二

執 筆 者 (平成17年3月現在)

桜井美枝 (さくらい・みえ)	群馬県教育委員会専門員
能登 健 (のと・たけし)	群馬県立歴史博物館上席専門員
小島敦子 (こじま・あつこ)	当事業団専門員
斉藤和之 (さいとう・かずゆき)	当事業団課長
飯森康広 (いもり・やすひろ)	当事業団専門員
関 俊明 (せき・としあき)	当事業団専門員
中島直樹 (なかじま・なおき)	玉村町教育委員会主任
楢崎修一郎 (ならさき・しゅういちろう)	当事業団専門員
石守 晃 (いしもり・あきら)	当事業団専門員
菊池 実 (きくち・みのる)	当事業団専門員
神保侑史 (じんぼ・ゆうし)	当事業団事業局長

以上執筆順

平成16年度年報紀要委員

大木紳一郎 (委員長)・山口逸弘・庭山邦幸・土谷慎二・坪川雅彦・深澤敦仁・
阿久津 聡・齋藤 聡・田村 博 (以上編集担当)・丸岡道雄 (総務担当)



研究紀要 23

平成17年7月29日発行

編集・発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県勢多郡北碓村大字下箱田784-2

☎ (0279) 52-2511#9

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 朝日印刷工業株式会社

BULLETIN OF GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

2005.7

23

GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

CONTENTS

SAKURAI, Mie :	1
Reexamination of Paleolithic Remains from Hashienishijuku Site	
NOTO, Takeshi & KOJIMA, Atsuko :	11
On the Location of Early Yayoi Period Settlements in the Tohoku District	
SAITO, Kazuyuki :	33
On the Character of Amaterasu Omikami (Great Divinity Illuminating Haven) and Ise Jingu (Ise Shinto Shrine)	
IIMORI, Yasuhiro:	57
Transition and Tendency of Inner Structure of the Small Scale Medieval Premises : Average Bay of Purlin of the Posthole-Type Building	
SEKI, Toshiaki & NAKAJIMA, Naoki:	85
Arrival Range of Tenmei Mud Flow in Tamamura Town, Gunma Prefecture: Regional Study of Asama Disaster in 1783	
NARASAKI, Shuichiro & ISHIMORI, Akira:	99
Database of Excavated Human Skeletal Remains from Gunma Prefecture: Collection of Gunma Archaeological Research Foundation	
NARASAKI, Shuichiro:	110
Database of Excavated Animal Bones from Gunma Prefecture: Collection of Gunma Archaeological Research Foundation	
KIKUCHI, Minoru:	119
A Story of Maebashi Army Airfield (2): Kamikaze Attack Corps, Makoto 36-37-38 Flight Team	
JINBO, Yushi:	158
A Study of Shikinen Sengu (Razer and Rebuilding of Shrine Building) of Kozeke (Gunma Prefecture) Ichinomiya Nuktsaki Shinto Shrine (3)	

01-350 / 6 / 23(2)



013500060002300 02



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団